



平成18年度
ふくしま型UD
実践リーダー養成事業
2006 報告書



福島県

INDEX

●ふくしま型UD実践リーダー養成事業の概要	1
●団長挨拶	2
●団員名簿	4
●第1回事前研修カリキュラム	5
●第2回事前研修カリキュラム	6
●米国視察研修日程	7
●視察先等の担当者一覧	8
●視察先別レポート	9
① ボストンコモン、ビーコンヒル	9
② ニューアイランドランド水族館	12
③ クインシーマーケット	14
④ ボストン美術館	16
⑤ ボストン市役所、スペクタクル・アイランド	17
⑥ アダプティブ・エンバイロメンツ	20
⑦ シティ・スクエア公園、チャールズタウン・ネイバーヨード	29
⑧ スポルディング・リハビリテーション病院	33
⑨ ボストン公共放送WGBH	36
⑩ トマス・クレーン公共図書館	40
⑪ ハーバード大学	41
⑫ 地下鉄(オレンジライン)、バス	43
⑬ パトリック・オーハンズ小学校	44
●個人別レポート	48
・ 阿部 美咲	48
・ 江連 香織	50
・ 大瀧 裕司	53
・ 桑原 了一	55
・ 直井 風子	57
・ 古川 あゆみ	59
・ 藤島 卓	62
・ 河野 由美子	64
・ 佐藤 玲子	66
・ 曽我 啓子	69
・ 村松 穎	72
・ 渡邊 大輔	75
●ボストン・フォトギャラリー	78
●総括責任者・引率・事務局より	90
■成果発表フォーラム	91

ふくしま型UD実践リーダー養成事業の概要

1 目的

ふくしま型UDの実現に向けて、実践能力を備えた中核的な人材を確保するため、UD先進国での海外研修を柱とした専門的な研修を実施するとともに、研修成果の発信や県内大学と連携した質の高い事後活動の展開、さらには施策提言のための場の提供までを体系的に実施し、UDの実践的リーダーの養成を図るものとする。

2 研修内容

ア 海外研修

- ① 派遣先 アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン
- ② 派遣期間 平成18年9月16日から9月23日(8日間)
- ③ 派遣人員 16名

団長(一般団員より選任)	1名
副団長(一般団員より選任)	2名
団員 一 般	積極的に自立生活等に取り組む障がいのある人 2名
団員 一 般	盲・聾・養護学校高等部生徒、障がいがある高等学校生徒 5名
団員 一 般	高等学校生徒 2名
団員 一 般	建築・設計業、製造業、運輸・通信業、小売業・飲食店、サービス業(旅館、社会福祉、医療等)、NPOなど、主としてサービスを提供する人で企画等に携わっている人又は経営者 3名
団員 一 般	引率教諭、事務局 4名

イ 事前研修・事後研修

研修区分	日程	場所
第1回事前研修	平成18年7月8日～9日	福島県男女共生センター
第2回事前研修	平成18年8月5日～6日	福島県男女共生センター
事後研修	平成18年10月29日	福島県男女共生センター

ウ 事後活動

活動区分	日程	場所
県との意見交換会	平成19年2月8日	福島県庁
成果発表フォーラム	平成19年3月3日	福島県立郡山養護学校

団長挨拶

平成18年度

ふくしま型UD実践リーダー養成事業

団長 河野 由美子



成田からデトロイトを経由し、約16時間の長い長いフライトを経て、私達は目的地であるボストンに到着しました。

今まさに、真っ赤な夕日が沈もうとする美しい夕焼けの空に迎えられ、レンガ色の建物が整然と並ぶ夕暮れのボストンの街を見下ろしながら、私達を乗せた飛行機は、ローガン国際空港に降り立ちました。

そのすばらしい夕日が暗示していたのか、今回の研修は、とてもお天気に恵まれました。

事前研修で、ボストンは北海道と同じ緯度に位置するという説明を聞き、9月とはいえ、だいぶ涼しくなってきていたであろうことを想定して、団員は皆、上着を何枚か用意しました。しかし予想に反して滞在中は半袖で過ごせるほどの陽気が続き、視察先への移動が身軽だったのはもちろんのこと、ボストン市役所の福祉担当であるスピネット氏がチャーターしてくださった船で、夏を思わせる日差しの中、大西洋に漕ぎ出すなど、すばらしい体験をすることができました。

ボストンはアメリカ人が憧れる街の一つであるというのが素直にうなずける、エレガントで美しい街です。マウントバーノン通りの歴史あるレンガ造りの住宅街もさることながら、ウォーターフロント再開発エリアの近代的な街並みも、レンガ色を基調とした建物が立ち並んでいます。

特に建築上の規定がないにも関わらず、奇抜な色をさけ、古い建物との調和を大事にした街づくりは、この街が、多くの歴史的人物を輩出し、アメリカの歴史を作ってきたというボストン市民の誇りと愛着のあらわれであると感じました。

今回の研修は、養護学校の生徒を含む老若男女16名、まさにユニバーサルデザインを象徴したような団員構成です。事前研修では、障がいのある団員から、自分たちに対してどのようなサポートが必要であるか、話を聞く機会を持ちました。し

かし寝食を共にする中で、私達にはごく自然に家族のような絆が生まれ、一緒に過ごす上でそういった配慮は当たり前の行為であるととらえるようになっていました。

研修やボストン滞在中に見られた団員同士の交流のあり方は、福島県が取り組んでいる「心のユニバーサルデザイン」を推進していく上で最も大切なものであり、この体験は、団員たちの心に刻まれ、今後の活動に生かしていくものと思っています。

また滞在中は、各視察先で大変あたたかい歓迎を受け、ボストンの人々のすばらしい心に触れることができました。特にアダプティブ・エンバイロメントのフレッチャー所長はじめスタッフの皆さんには、新しい事務所への移転の最中にも関わらず、合間をぬって視察先にまで同行していただき、団員一同その心遣いに心から感激いたしました。また、日本よりアダプティブ・エンバイロメントに出向されている博報堂の井上滋樹さんには、終日視察に同行していただき、慣れない異国の中でとても心強く感じたばかりか、井上氏が記事の連載をしている読売新聞に、今回の視察や本県のユニバーサルデザインの取り組みについて紹介をしていただき、そのご好意に感謝の気持ちで一杯です。

帰国後、京都で「ユニバーサルデザイン国際会議」が開催され、団員をはじめ本県の代表者も出席し、福島県が推進する「心のユニバーサルデザイン」の取り組みについて高い評価をいただきました。

ユニバーサルデザインは、教育や建築、環境と、取り組むべき内容は多岐にわたります。しかしそれらを進めていく上で何よりも大切なのは、相手を思いやり、理解しようとする心であり、その「心」が生み出される過程こそがユニバーサルデザインであると思います。

ユニバーサルデザインの生みの親であるロン・メイス氏の「これはあなたたちの問題もあるんだよ」という言葉を胸に刻み、ユニバーサルデザインは全ての人のためであると同時に、自分と大切な人のためでもあるということを、団員と共に多くの人に伝えていきたいと思っています。

団員名簿

【団長】

役職	氏名	性別	所属等
団長	こう の ゆみこ 河野由美子	女	NPO法人 地域生活支援ネット OneOne副理事長

【成人】

役職	氏名	性別	所属等
副団長	むら まつ ただし 村松 稔	男	福島県中途失聴・難聴者協会会长
団員	さ とう れい こ 佐藤玲子	女	(株)佐藤信博建築設計事務所
団員	そ が けい こ 曾我啓子	女	小規模作業所ストロークハウス福島所長
団員	わた なべ だい すけ 渡邊大輔	男	(株)渡辺組専務取締役

【学生】

役職	氏名	性別	所属等
副団長	ふる かわ 古川あゆみ	女	県立橘高等学校普通科3年
団員	あ べ み さき 阿部美咲	女	県立福島西高等学校普通科2年
団員	え づれ か おり 江連香織	女	県立郡山養護学校高等部2年
団員	おお たき ゆう じ 大瀧裕司	男	県立会津養護学校高等部3年
団員	くわ はら りょう いち 桑原了一	男	県立大笹生養護学校高等部2年
団員	なお い ふう こ 直井風子	女	東日本国際大学附属昌平高等学校高等部2年
団員	ふじ しま すぐる 藤島卓	男	県立あぶくま養護学校高等部3年

【総括責任者・引率・事務局】

役職	氏名	性別	所属等
総括責任者	さ が まさる 佐賀勝	男	生活環境部人権男女共生グループ主幹
引率	おお とも よう こ 大友陽子	女	県立平養護学校教諭
事務局	あが つま ひろし 上妻弘	男	教育庁特別支援教育グループ指導主事
事務局	すず き ひろ ゆき 鈴木裕幸	男	生活環境部人権男女共生グループ主査

第1回事前研修カリキュラム

時間	7月8日（土）	時間	7月9日（日）
9:30	受付	8:00	起床、朝食
10:00	開講式、オリエンテーション ・あいさつ（特別支援教育グループ参事 渡邊 世子） ・事務局職員紹介 ・一般団員候補者紹介 ・日程説明	9:00	「日本における特殊教育の現状について」 特別教育支援グループ 指導主事 上妻 弘
10:30	講話「研修参加にあたって」 人権男女共生グループ 主幹 佐賀 勝	9:50	(休憩)
11:00	(休憩)	10:00	「支援の在り方についての理解」 発表者 成人団員 村松 複 学生団員 江連 香織
11:10	「ふくしま型UDについて」 人権男女共生グループ 主幹 佐賀 勝	10:50	(休憩)
12:00	(昼食)	11:00	「候補地の具体的な情報等について」 人権男女共生グループ 主査 舟山 真吾
13:00	演習1 班別研修 ・班編成 ・自己紹介 ・各自の研修テーマの発表 (多様な考え方を理解する) ・役割の決定	12:00	(昼食) ※VTR鑑賞
13:50	(休憩)	13:00	演習2 班別研修 ・研修プランの検討 ・視察に関する要望他
14:00	「平成17年度うつくしま県民の翼に参加して」 平成17年度うつくしま県民の翼UD研修コース 副団長 菅野 真由美	14:20	(休憩)
14:50	(休憩)	14:30	演習2 班別研修 ・研修プランの検討 ・視察に関する要望 ・まとめ
15:00	「渡航準備等に関する留意事項について」 人権男女共生グループ 主査 鈴木 裕幸	15:30	事務連絡等 ・次回研修会までの課題他 「訪問先での視察テーマや質疑事項について」
15:50	(休憩)	16:00	解散
16:00	「疑似体験」 特別教育支援グループ 指導主事 上妻 弘		
17:30	(休憩)		
18:00	夕食 レストラン「未来」		※7/8(土)19:00～交流会
19:00	交流会		自己紹介、VTR鑑賞、意見交換等
20:00	自由行動		※本の貸出
21:00	(就寝)		

第2回事前研修カリキュラム

時間	8月5日（土）	時間	8月6日（日）
9:45	受付	8:00	起床、朝食
10:00	オリエンテーション ・あいさつ	9:00	「現時点での研修プランや候補地の具体的な情報等について」 近畿日本ツーリスト（株）福島支店 課長 江橋 秀久
10:15	講話 「欧米におけるユニバーサルデザインの現状について」 (株) ユーディット 代表取締役 関根 千佳	9:50	(休憩)
11:40	事務局からの説明 ・日程説明	10:00	演習1 班別研修 ・訪問先での視察テーマや質疑事項の検討
12:00	(昼食)		
13:00	演習1 班別研修 前回の課題「訪問先での視察テーマや質疑事項について」の報告、意見交換	11:20	(休憩)
14:00	(休憩)	11:30	演習2 全体研修 ・訪問先での視察テーマや質疑事項の発表他
14:10	「渡航準備等に関する留意事項について」 近畿日本ツーリスト（株）福島支店 課長 江橋 秀久	12:00	(昼食)
16:10	(休憩)	13:00	「事務局からの連絡事項について」 ・今後のスケジュール ・県との意見交換会 ・成果発表フォーラム ・報告書の発行 人権男女共生グループ 主査 鈴木 裕幸
16:20	「県内におけるユニバーサルデザインへの取組みについて」 人権男女共生グループ 主査 鈴木 裕幸	13:45	(後片付け、会場設営)
17:00	(休憩)	14:15	閉講式
18:00	夕食 レストラン「未来」	14:20	結団式リハーサル
19:00	交流会	15:00	結団式 ① 開会 ② 団員証交付 ③ 壮行のことば ④ 団員決意のことば ⑤ 閉会
20:00	自由行動		
21:00	(就寝)		
※8/5(土)19:00～交流会 意見交換、VTR鑑賞等		15:30	解散

米国視察研修日程

月日(曜)	現地時間	行程・訪問先等	研修内容等
9月16日 (土)	7:15	福島発	貸切バスにて成田空港へ
	15:55	成田空港発	空路、ボストンへ(デトロイト乗り継ぎ)
	19:00	ボストン着	到着後、ホテルへ
9月17日 (日)	9:30	ボストンコモン(米国最古の公園) ビーコンヒルの高級住宅街 マサチューセッツ州議事堂	・UDの視点からの街並み散策
	10:30	ニューイングランド水族館 コロンブス・ウォーターフロント公園	
	12:00	クインシーマーケット	・昼食
	13:50	ハーバード大学	
	15:30	ボストン美術館	
	10:20	ボストン市役所	・都市開発計画(ウォーターフロント)について
9月18日 (月)	12:00	クインシーマーケット	・水力交通機関のユニバーサルデザインについて
	13:00	ハーバー・アイランド(スペクタクル・アイランド)	・昼食買出し ・島の計画的埋め立ての観察
	9:00	アダプティブ・エンバイロメンツ	・バレリー・フレッチャー所長の講演 ・アメリカの統合教育に関するビデオ鑑賞 ・公正住宅法についての講義
9月19日 (火)	14:15	シティー・スクエア公園 チャールズタウン・ネイビーヤード	・スポーツによるリハビリテーションの説明 ・障がい者のリハビリに関する考え方や 社会復帰プログラムについて
	15:30	スポルディング・リハビリテーション病院	・病院における障がい者雇用について
	17:50	地下鉄(オレンジライン)の体験乗車	
	9:30	ボストン公共放送WGBH	・聴覚障がい者対応として・字幕放送 ・視覚障がい者対応・副音声放送 ・リアルタイム字幕表示の実演
9月20日 (水)	12:00	ハーバード大学ビジネススクール	・既存の建物と新しいものの融合 ・コミュニティとしての役割を兼ねた各種サービス
	14:00	トーマス・クレーン公共図書館	・ウォーターフロント再開発状況
	16:00	コンベンションセンター・連邦裁判所ビル	
	10:00	パトリック・オーハンズ小学校 コープリィ・スクエア クインシーマーケット	・インクルージョン(全校生徒の33%が 障がい児)の実際 ・授業参観(3グループに分かれて) ・専門指導員、担任、保護者との懇談 ・児童との給食時の懇談
9月22日 (金)	12:32	ボストン発	空路、帰国の途へ(デトロイト乗り継ぎ)
9月23日 (土)	17:12	成田空港着	貸切バスにて福島へ
	18:35		
	23:55	福島着・解散	

視察先等の担当者一覧

視察先	担当者	役職等
□ボストン市役所 (City of Boston Officials)	Stephen J.Spinetto Juanita E.Mincey	Commission for Persons with Disabilities : Commissioner Disability Program Specialist
□ハーバー・アイランド (スペクタクル・アイランド) (Spectacle Island)	Christopher Hart Shigeki Inoue	Adaptive Environments : Project Coordinator Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison
□アダプティブ・エンバイロメンツ (Adaptive Environments)	Valerie Fletcher Shigeki Inoue Barbara Chandler	Executive Director Fellow / Japanese Media Liaison Project Director
□シティー・スクエア公園 (City Square (National Park Service))	Christopher Hart	Adaptive Environments: Project Coordinator
□チャーチズタウン・ネビーヤード (Charlestown Navy Yard)	Shigeki Inoue Barbara Chandler	Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison Adaptive Environments: Project Director
□スパルディング・リハビリテーション病院 (Spaulding Rehabilitation Hospital Network)	Bobbi Delaney Sandra Villante Judy Waterston Oswald Mondejar Valerie Fletcher Christopher Hart Shigeki Inoue	Physical Therapist Recreation Therapist President / CEO Vice President of Human Resources Adaptive Environments: Executive Director Adaptive Environments: Project Coordinator Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison
□地下鉄(オレンジライン)の体験乗車 (Massachusetts Bay Transportation Authority / Orange Line)	Shigeki Inoue	Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison
□ハーバード大学ビジネススクール (Harvard Business School)		
□ボストン公共放送WGBH (WGBH Public Radio & Television Station)	Tom Aponte Barbara Chandler Shigeki Inoue	Director of Operations Adaptive Environments:Project Director Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison
□トマス・クレーン公共図書館 (Thomas Crane Public Library)	Ann McLaughlin Shigeki Inoue	Director Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison
□パトリック・オーハンズ小学校 (Patrick O' Hearn Elementary School)	Bill Henderson Valerie Fletcher Shigeki Inoue	Principal Adaptive Environments: Executive Director Adaptive Environments : Fellow / Japanese Media Liaison

観察先別レポート No.1

ボストンコモン、ビーコンヒル

報告者：直井 風子

●ボストンコモン(BOSTON COMMON)

ボストンコモン(Boston Common)は、ボストン市の中心部にある公園で、1634年に造られたアメリカ最古の都市公園である。トレモント、パーク、チャーチ、ボイルストンの各通りに囲まれ、面積は20.2万m²。ボストン・パブリック・ガーデンと隣接する。

独立戦争まではイギリス軍のキャンプとして利用されていた。独立戦争の始まりであるレキシントン・コンコードの戦いは、ここから出発したイギリス兵によって火蓋が切られた。その後1830年までは牛が放牧される牧草地帯となっていた。また、1817年までは一部処刑場としても使われていた。



今日では公園としてボストン市民や観光客に親しまれており、公式・非公式の様々な集まりに利用されている。コンサートやソフトボール大会などが開かれるほか、冬季は園内のフロッグ池でアイススケートも楽しめる。この公園で演説を行った著名人には、マーティン・ルーサー・キング、ヨハネ・パウロ2世などがある。

また、ボストンコモンに隣接するボストン・パブリック・ガーデン付近は1830年に埋め立てられた地区であり、パブリックガーデンが完成したのが1837年となっている。

このボストンコモンおよび、ボストン・パブリック・ガーデンは、平坦になるように配慮されており、勾配をつける場合は、折り返しのスロープにする事で緩やかな勾配にされており、車椅子利用者などにとっても利用しやすいような配慮が感じられた。

また、隣接するビーコンヒル地区周辺の建物が文化財の指定を受けており、



視察先別レポート

建物を壊し駐車場を作ることができないために、ボストンコモンとボストン・パブリック・ガーデンは地下 3 階の駐車場になっている。

さらに、この地下駐車場には、エレベーターが設置されていて、各階のエレベーター付近は、障がいを持つ人たちのための駐車スペースが確保されている。

また、この地区一帯は観光の面からも脚光を浴びており、フリーダムトレイルと言われる独立戦争時代の史跡をめぐる全長 5 キロ弱の観光ルートが通るほか、ボストンダックツアーと言われる旧アメリカ海軍から払い下げを受けた上陸用舟艇に乗った周遊観光も経由する。



私たちが訪れたときは、公園内の球技場で野球が行われていたり、散歩する人々がのんびりと過ごす「憩いの場」として利用されていた。

●ビーコンヒル(Beacon Hill)

ビーコンヒルは、ボストンコモンとボストン・パブリック・ガーデンの北に隣接しており、イギリスのロンドンに似た町並み。ニューイングランド風といわれる古いレンガ造りの家が立ち並ぶ富裕層の住宅地である。道路や歩道は、レンガや石畳となっており、街灯は 1800 年代のガス灯がそのままに残っており、アメリカ最古の町並みという感じがした。



このビーコンヒルという地名は、1620 年頃の植民地争いをしていた時代に、領地に危険が迫った事を知らせる手段として、この丘の頂上で狼煙を焚いていたことに由来するといわれている。

この近辺の建物は、すべてニューイングランド風と言われるイギリスを模した建物で、かつては帆船で 1700 年代に渡って来た白人プロテスタントが正統派だとする考え方があり、そうした正統派にとっては、ニューイングランド風の建物に住むことがステータスとされていた。

この地域は、植民地時代から貿易商などのかなりの富裕層が住んでいたとされており、現在においてもボストン市内での最高級住宅街とされており、今回歩いた中では、2004 年の大統領選挙に出馬した民主党の上院議員、総資産額 10 億ドルと推測されるジョン・ケリー氏の自宅が見受けられた。



ジョン・ケリー上院議員の自宅



マサチューセッツ州議会議事堂

ビーコンヒルの周辺には、マサチューセッツ州議会議事堂がある。この州議会議事堂は 1798 年にチャールズ・ブルフィンチの設計で建てられた由緒ある公共建築物であり、他の州の議会議事堂のモデルにもなった建物。庁舎の入り口には、州議会議員としてここで活躍した後に、第 35 代アメリカ合衆国大統領となった J·F·ケネディの像が建てられている。

また、州議会議事堂の前にはアメリカの南北戦争の時代に始めて組織された黒人だけによるチームの「ショー・第 54 連隊記念碑」がある。これら州議会議事堂周辺にも独立戦争時代の史跡があり、フリーダムトレイルの中に組み込まれている。



州議会議事堂前に立つ J.F.K の像



ショー・第 54 連隊記念碑



フリーダムトレイルを記すマンホール

そんなビーコンヒルの一角で、最も印象に残ったのは A.Corn ストリートと呼ばれる私道で、裕福な貿易商が集まるビーコンヒルの中でも、最も裕福な階級の人たちが住んでいたといわれる地区で、そこには 1700 年代の馬車道として使用されていた石畳がそのまま残っていた。

このビーコンヒルは、アメリカ発祥の地 ボストンの中でも、特に歴史的な重要文化財が多く、それらを保存するという考え方からも、建て替えや大掛かりな建物の改造などはできない為に、障がいを持つ人に対する配慮というものは、まったくされていなかつた。今回の視察時にも、古いレンガや石畳はデコボコしていて、車椅子での移動には振動が大きく不向きだと感じた。

ボストンでも、文化財保護が障害者法(ADA 法)よりも優先されることが分かったわけだが、人々が暮らす町自体が文化財となっていることには驚いた。



A.Corn ストリート



ニューイングランド水族館

報告者:古川 あゆみ



ニューイングランド水族館は、週末になると大勢の人で賑わうボストンのウォーターフロント再開発エリアに位置しているユニークな展示方法で有名な水族館。環境に対してもっと敏感になり知識を深めてもらうために、地元のボストン湾に生息するものから、珍しいアマゾン川の魚まで、2000種類以上、6000匹以上の海の生物が集められている。また、福島県ではおなじみのアクアマリンふくしまのモデルとなった水族館でもあり、ニューイングランド水族館での特徴ある取り組みは国境を越えて注目されていると言える。

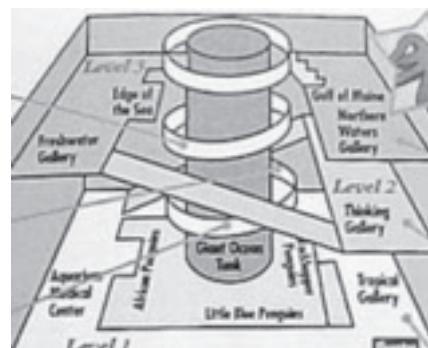


一階のメイン・フロアから入って、最初に目にすることは、円筒上の深さ7mの「ジャイアント・オーシャン・タンク」。4階部分まで突き抜けるように立っていて、周囲の長さは約12m、というその名の通り巨大な水槽。順路はタンクの回りにらせん状にあるので、様々な角度から見学出来るようになっていた。

<良い点>

工夫された展示方法が随所に見られ、UDが様々な所に取り入れられていると感じた。

- 館内は緩やかなスロープとなっていて、最上階を除いて全て車椅子で移動可能だった。足腰が悪い方でも負担がかからずに観覧できるようになっていた。



- 背が小さい子供でも水槽を見られるように、水槽の下に棒を取り付け、上れるようになっていた。



- 壁の一部も下までガラス張りになっていて、車椅子の方や子供への配慮がされていた。

- アメリカの川魚コーナーには、さわれる展示があり、ヒトデ、ヤドカリ、巻き貝、カブトガニ等に実際に手で触れることができた。その展示の側には小さな子供の身長専用の水槽もあった。



- 階段の手すりの終わりが30cmほど長めに作られていて、階段の終わりを分かりやすくしたり、転倒防止の役目を果たしたりしていた。

- 館内だけでなく外にも水槽があり、外にいる内から水族館の気分を味わうことができ、開かれている印象を受けた。



- 併設されているサイモンズアイマックス映画館では音声説明が受けられるようになっていた。また手話のサービスも月の第1日曜日に行われていた。

<悪い点>

- 館内が全体的に暗く、足下や魚の説明書きが見にくかった。
- 音声説明が無かった。
- 点字が無かった。

ニューイングランド水族館には「もっと環境に敏感になってほしい」というテーマがあった。パンフレットにも「海をきれいに保って海の生物を守りましょう」等と書いてあった。しかし全て英語なので、外国からの観光客にはそれが伝わりにくい。他の言語のパンフレットを用意したり、もっとテーマを分かりやすく表示したりするなどの工夫が欲しかった。

視察先別レポート

<福島での展開 これから出来ること>

1. アクアマリンふくしまがニューイングランド水族館をモデルとしているので、海の生き物を触れるコーナーなどは福島でも取り入れられている。
2. 音声解説や点字をもっと充実させてアクセシビリティの向上を目指す。
3. 建物は全ての場を車椅子でも行けるようにする。

どんな人でも楽しめるように水族館の味わい方、周り方のバリエーションを増やす。例えばニューイングランド水族館ではパンフレットにスタンプが押せるようになっていて、館内各地にあるスタンプを探すアトラクション感覚の楽しみもあった。他にも館外にアザラシの水槽がおかれていて、道行く人の誰もが水族館に入らなくても気軽に水族館の雰囲気を味わうことが出来るようになっていた。そのようなちょっとした展示方法の工夫など、他にもたくさんニューイングランド水族館から学べると思う。誰でも制限されることなく様々なことに取り組める態勢をつくって欲しい。

視察先別レポート No.3

クインシーマーケット

報告者:桑原 了一



クインシーマーケットの歴史は大変古く、1700 年代～1800 年代までのマーケットの中心を果たした食肉売り場の建物が、マーケット近辺に現存しています。

また、現在のマーケットは、1826年に誕生して以来、150年に渡って食料品などの小売りと卸売の分配センターとして機能していました。

現在は、日常の生鮮食品だけでなく、地元ボストンのグッズ、特にボストンレッドソックスや、ハーバード大学のグッズなどを取り揃えた土産物屋が多くなった。また、レストラン、惣菜屋、ブティック、ギフトセンター、ファーストフード店など、様々な店が建ち並び、手押し車の行商人や大道芸人がお祭りのような雰囲気

を添えています。

1964年からの再開発事業によって、今ではボストンでもっとも活気のある場所へとよみがえりました。

今回の視察で、私たちは数回このクインシーマーケットを訪れましたが、いつ来ても買い物客や観光客で賑わっていました。



参考になった点は、町全体に歩道と車道を隔てるものや段差が一切ないということです。人の出入りが多く賑わいのある町としては、どんな人でも移動しやすいと思います。

改善してほしいところと言えば、段差や障害物はないものの地面が石畳みであったり、道幅が狭かったりするため、車椅子やお年寄りは少々歩きにくいのではないかと思います。また、歩道と車道を隔てるものが無い分、逆に日本人にとって歩きにくいとも感じました。



ボストン美術館

報告者:大瀧 裕司



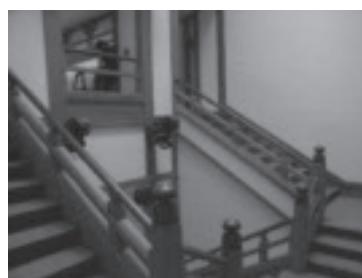
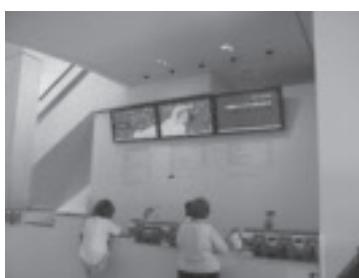
ボストン美術館(Museum of Fine Arts,Boston)はボストン市内にある大きな美術館です。

美術館の中には、アメリカやヨーロッパの大きな絵画、エジプトの像、日本や中国など東洋の美術品が数多くありました。絵や彫刻のほかに、家具や食器なども展示されていました。特にエジプトの彫刻像は、大きくて力強く堂々としていた様子に驚き、思わずじっと見つめてしまいました。また、日本のものは、阿修羅像などの仏像や浮世絵をはじめとして、階段を日本のお寺を模した一画などもありました。



1. 気づいた点

- 世界の多くの国の大切な美術品を観ることができる。
- 車いす用のエレベーターがあって、いつでも使える。
- 月曜日から日曜日まで毎日開いている。特に水曜日から金曜日までは、夜の9時45分まで開いているので、遅い時間でも見に行くことができる。
- 入り口にタッチパネルがあった。
- 館内は広くて、歩きやすかった。
- すべての洗面所やエレベーターは車椅子で利用できる。



2. 福島県でこれからできること

- 車椅子の人でも入りやすい入り口を作ってほしい。
- 夜遅くまで開いていると便利だと思う。

観察先別レポート No.5

ボストン市役所

スペクタクル・アイランド

報告者：渡邊 大輔



ボストン市役所は、ボストン市街の中心部に位置し、クインシー・マーケットに隣接している。

その庁舎の外観は、ボストン市内では珍しいコンクリート打ちっぱなしの巨大な建物で、何とも味気ないものだった。

また市役所前のシティホール広場は、他の縁に囲まれた美しい公園と異なり、レンガの敷き詰められた、何の変哲もない広場で活気もないために、かえって殺風景で物悲しさを覚えた。



正直、「歴史の街ボストン」の顔でもある市役所に行くことを楽しみにしていた私にとっては、少々がっかりするものだった。

まず最初に驚いたのは、庁舎入り口の自動ドアに入った直後、屈強なガードマンが数名入り口に立っており、金属探知機による持ち物検査を受けたことだった。さすが、アメリカ。テロ等の対策として最低限のセキュリティは行っているようで、平和ボケした日本との温度差を感じた。



次に私たちを感動させたのは、大きな部屋に通されたとき。10m四方はありそうな会議室の中央に置かれた、現在進行中のウォーターフロント再開発についての巨大な模型だった。

私たちを案内してくれたステファン・スピネット氏の説明によれば、ボストン市内は旧来埋め立てを繰り返して現在の地形になっており、さらに今回の再開発により、新しい美術館やコンベンションホールなど、様々な文化・情報を世界に発信することができる新たな施設も増え、衰退した都市機能を蘇らせるものとして期待されていると話していた。

●セントラルアーテレイ(中央幹線)・第3トンネルプロジェクト

1982 年から始まったこのプロジェクトは、ボストン市街地の中心を通る高架線の 93 号線という高速道路を地下に埋めるものである。では、なぜ高速道を地中化するのか。理由は下記のようなものが挙げられる。

- ・ 1950 年代に作られたもので老朽化が進んでいる。
- ・ 建築当時の交通量を大幅に超えた為に交通渋滞が多発する。
- ・ 交通渋滞に伴う公害・騒音問題が深刻化している。
- ・ 中心市街地とウォーターフロントを「分断」している。

これらの課題を解決するために巨大な穴掘り工事をしているので、ボストンでのニックネームは「Big Dig(巨大な穴掘り)」と言われています。そう考えると、現在東京の日本橋で、首都高によって失われた青空を取り戻そうと、首都高地化を訴える運動とよく似ているのかも知れないと感じた。

事前研修にて、この 1.7 兆円を超える巨大な再開発計画について、ごくごく簡単なレクチャーを受けていたが、その模型を見て金額もさることながら、その範囲と規模の大きさに唖然としてしまった。みなとみらい 21 地区や汐留など、日本での大型都市開発に間に接してきた私でさえ、その規模に絶句したのだから、団員の高校生にとっては、おそらく想像できない規模だったと思う。

1991 年 9 月に開始された工事も、一部供用開始されるなど、いよいよ完成が近づきつつあり、地中化されることによりオープンスペースとなる土地の利活用方法について、市民からの意見を集約する「パブリック・インボルブメント(PI) 方式」で検討する取り組みが行われている。

●水辺の UD

ウォーターフロント整備の一環として進められているのが、港湾でのユニバーサルデザイン。特に乗船時のアクセシビリティについて重要視されていた。

これは、大小様々な島を持つボストン湾に囲まれた立地と、世界最大規模の大型豪華客船まで停泊する港町であることなど、船で移動する機会が非常に多いことから、必要に迫られ対応していったことと推測される。

特に面白いと感じたのは、船から陸へ下りる際の浮き桟橋(スロープ)が、勾配の急なものと緩やかなものが 1 セットとなっていることだった。



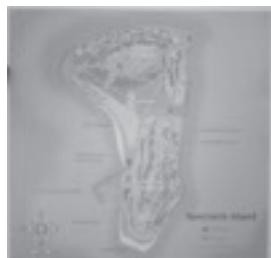
一見、何故このような事をするのかと理解に苦しんだが、スピネット氏の説明によれば、ボストン湾内の潮の満ち引きによる海面の高低差は5m近くなることもあり、浮き桟橋の勾配が非常に急になってしまふとの理由から、満潮時・干潮時に合わせて勾配の違う浮き桟橋を使用することだった。

また、浮き桟橋など使用できない小型船への乗降時には、少々急な勾配になてしまうが、簡易なスロープも準備されていた。

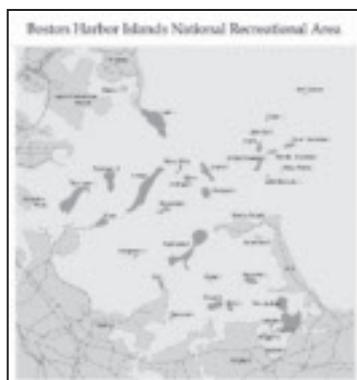


●スペクタル・アイランド

先にも述べたとおり、ボストン湾には大小様々な島が存在する。例えば、世界最大規模の汚水浄化施設の聳え立つディア・アイランドや、フォートウォーレンの砦が名所として知られるジョージ島など、30を超える。



今回、私たちは、スペクタカル・アイランドを訪問した。この島は、かつてはゴミ捨て場、伝染病の隔離病院、馬の処分施設として利用されていた経緯を持ち、深刻な環境汚染の原因となつたために、汚染の封じ込めが行われた。



汚染除去の際に、ボストン市街地の高速道路地中化工事から排出される残土が大量に持ち込まれ、元は鉄アレイ型の島の形がそら豆型に変形して言つた。

現在のスペクタル・アイランドは、なだらかな丘陵地帯となっており、介助の人があれば車椅子でも十分回って歩ける状態になつた。

このボストン湾の水質について、かつては全米でも指折りと言われる程、汚染が進んでいたという汚点を残した。そこでこの汚点解消のために、ボストン市内の汚水処理能力向上を目的として、ディア・アイランドに超大型の卵形汚水処理プラントを建設したり、スペクタカル・アイランドの土壤汚染対策を行うなど、多額の費用を投入し海洋汚染防止に努めた結果、浄化が進んできたと言われている。



視察先別レポート No.6

アダプティブ・エンバイロメント

報告者：渡邊 大輔



ボストン滞在3日目、私たちはアダプティブ・エンバイロメントへと向かった。

このアダプティブ・エンバイロメント訪問は事前研修時から、今回の研修での最も重要な視察先の1つとして位置づけられており、事実としてユニバーサルデザインの実践的な知識を身につけようとする私たちに、より多くの気づきと勇気を与えてくれ、この研修を真の意味で実りあるものしてくれた。

お調子者の私などが、この重要なセクションの報告書を書いても良いのか、未だに悩んでいるが、このアダプティブとの出会いについて書いてみたい。

●アダプティブ・エンバイロメントとは

アダプティブ・エンバイロメント(以下アダプティブと略す)は、1978年に設立された、障がい者と高齢者のためのデザインを研究するNGOである。その活動範囲は、狭い地域から国際社会について、都市計画から情報化についてまで、非常に広範かつ多岐にわたっている。

1998年から「21世紀へのデザイン学会」を補佐、2000年に横浜で開催されたUD学会を「国際ユニバーサルデザイン協議会(IAUD)」と共同でホストを務め、我々の研修の数週間後に京都で行われるユニバーサルデザインの国際会議のホストを行うなど、近年目覚しい活動を行っている。

私たちが訪問した時は、旧事務所からポートランド通りに面する新しい事務所に引越しをしたばかりの状態で、広々としたオフィスの中は、様々な段ボール箱が積み上げられ、屋内の電気工事や内装工事の真っ只中であった。

非常に忙しい中での視察訪問であつたのに、スタッフの方々は、私たちを熱烈歓迎してくれ、重要視察先ということで、多少緊張していた私たちを和ませてくれた。



●アダプティブの取り組み

アダプティブでは、マサチューセッツ州を含む 6 つの州からなるニューイングランド地方での、アメリカ障害者法(ADA 法)についての様々な取り組み、公正住宅についての相談窓口としての活動や、ユニバーサルデザイン(以下 UD と略す)の普及についての様々な取り組みを行っている。

- ① UD・ADA 法・教育についての資料の展示・閲覧、相談の受付。
- ② 全米からの住宅へのアクセシビリティについての相談。
- ③ 外部からの研究者の活動の場の提供。
- ④ UD についての製品の展示(当然日本製品も展示するという。)
- ⑤ UD についての書籍や製品の販売ショップの設置・運営。
- ⑥ UD についての様々な事例イメージの展示。
- ⑦ ウェブ上での UD についての情報提供。

上に挙げたのは、私たちが視察した際に説明があった取り組みの一部であり、アダプティブのホームページを見ると有償でのコンサルティング等も行っている。
(<http://www.adaptiveenvironments.org/>)

今回オフィスを引っ越したことも、これらの様々な業務を行うのに手狭になつたためと言う。

アダプティブの新オフィスは 2006 年内に完成を目指しており、今から展示に関する様々なアイデアや、企画展示の内容についてなど計画しているとのことだった。

余談だが、「トイレの便器は是非 TOTO の UD に配慮された新製品に交換したい。」(バレリー・フレッチャー所長談)など、冗談交じりに日本企業の UD の取り組みについて、高い評価をしていた。

また、情報の提供と言うことについては、たくさんの出版物の刊行を行っており、これらを電子化しオンラインで無償で利用できるようにしたい。また、刊行して普及するまでの時間がもつたいために、オンライン化を進めている。いつでもどこでも、誰でも無償で見ることが出来るということを考えている。

さらに、現在のアダプティブのウェブサイトは英語と一部スペイン語などの言語でしか見ることができないが、将来的には日本語のウェブサイトを公開したいと意欲的だった。



●アダプティブの提案する UD

アダプティブに到着してやや暫くの雑談の後、バレリー所長から UD についてのレクチャーを受けることになった。

冒頭に、「福島県は高齢化ということだけでなく、同時に障がいを持った人たちに対する取り組みも重要であるという認識の下、さまざまな活動に取り組んでいる、日本の中でも数少ない都道府県の一つであることに敬意を表する。」とお褒めの言葉をいただいた後に、レクチャーが始まった。

以下、レクチャーの内容を、下のとおりまとめてみた。



バレリー・フレッチャー所長
(Valerie Fletcher)

◇UD の定義：

Human centered design (of everything) with everyone in mind
すべての人に考慮された人間中心のデザイン

デザインによって、生活の自信、心地よさ、コントロールが利くということが得られる。人間の能力について個々に違いがあるのは当たり前であり、だからそれがどのように自分たちの生活に影響してくるかということを土台に、デザインを考えなければならない。

アメリカでは、障害ということは、どのくらい自立して移動することが出来るかということを始点にして考えられていた。しかし、障害でも例えば車椅子を使うなどの目に見える障害は、簡単に理解することが出来るが、目に見えない障害について、理解し、取り組まなければならぬということが、ここ 20 年間で大きく変わってきた。

この背景としては高齢化、たとえば痴呆患者にどのように取り組んでいくかということの重要性を理解し、これをデザインの中に取り入れていくということが必要であるという認識が強まってきたのだ。

日本が UD についてリーダーシップを発揮しているといわれる背景には、他のどの国も経験していない急速な高齢化と、さらに少子化の問題に対応していかなければならないからだ。

UD とは、高齢化していくと、どの様なところが失われていくのか、例えば骨がもろくなっていくことや、血圧の変化など、世代が変わることによって起る事象もデザインに考慮していくことである。

さらに、高齢化ということだけでなく、たとえ障がいを持った子供でも、すべてを受けることが出来るような社会を作っていくことが重要であり、UD はそのためのツールのひとつである。

WHO では障害の定義を機能的な違いがあり、障害を持つということは人間であれば、誰でも体験することであると再設定した。

ここで注意しなければならない重要なことは、機能的な限界というものは、環境によって左右されることである。

たとえば、足の不自由な人が職場に行くのに、階段があり人を呼んで手伝ってもらわなければならぬとして、まずは階段という大きなバリアがあり、うるさいときには声が聞こえないために人が助けに来てくれないということが障害になるが、その人の自宅をオフィスにして、自由自在に動くことが出来れば、機能的な限界は最小限に抑えることが出来、それは障害とはいえないものになるかもしれない。

UD というものは、機能的な限界や障害というものを最小限にする力を持っている。

アメリカでは障害の度合いを左右する環境として、物理的環境は当然のこと、コミュニケーション環境(電話、テレビ、ラジオなどや、テキストやデジタル媒体による情報)により学習における環境を UD にすることに取り組んでいる。

社会的環境は、社会が障害をどのように受け入れるか、人の違いに対して寛容な心を持った態度で示すことである。

以前はバリアフリーということに重きを置いていたが、現在の UD は、バリアフリーということだけでなく、障がいを持った人たちのパフォーマンスやコミュニケーション、さまざまな経験をより高めてあげるデザインのファシリエーター(世話人)である。

その際の手段として重要視されるのが、UD の 2 つのキーである。1 つ目は「ユーザーエキスパート」と言われる考え方で、障がい者自身が自分にどのような物が合うのかを一番よく知っているという考え方。

そしてもう一つのキーが「UD の 7 原則」である。UD の 7 原則も 1997 年に作られ来年 10 周年を迎えるが、時の流れとともに、社会の変化に合わせて変化していくものかもしれないし、それを変えるのはあなたかもしれない。

これら UD の取り組みの他に、現在重要視されてきているのが、グリーン・デザイン(GD)で、環境の持続的な発展ができる、環境を大事にするデザインをさす。

UD と GD により、環境的・経済的・社会的持続性ある社会を実現させたい。



◇UDを進める日本についての評価

日本では、UDと高齢化が密接に結びついており、ビジネスになると注目されている。

UDについての取り組みは、日本の企業が世界で一番真剣に取り組んでいるとされており、国際UD協会（IAUD）に参加する日本企業数が145社という点は、世界的に見ても非常に多い。トヨタ自動車・パナソニック・TOTOは企業を上げて、ビジネスと言う観点だけでなく、企業が果たす社会的責任としてUD・グリーンデザインについて参画しており、世界的にUDを広めるリーダー的企業とされていた。

また、法律面、行政面では国土交通省が昨年、UDの方針を策定する際に、実際の利用者の参加の義務付け、道路・建物の設計についてユーザー エキスパートを導入した。

◇UD先進地としての熊本県の取り組み

熊本県は、この6年間で大幅にUDを取り入れた。都市計画から民間での活動にいたるまで、これほど短期間に取り入れた例は世界的に珍しい。

この取り組みを進めた潮谷知事は、障がい者の教師であった経歴を持つ。

潮谷知事がこれまでの経験を生かし、インクルーシブ・エディュケーションという、障がい児を他の生徒と同じ教室で学ぶという方法を取り入れた。

また、県営住宅は、障がい者が非常に高い質の生活ができ、自力で自室への出入りができるように配慮されている。

さらに熊本の商店街は、看板や歩道の表面仕上げなどについて低コストで実現できるUDを取り入れ、高齢者用のカートなどを分散配置し、ボランティアが高齢者の補佐に当たるなど、非常に活発に活動している。

これらの取り組みに対しても、ユーザー エキスパートの考えで進められており、数百人規模で街づくりに障がい者が参加している。

リハビリセンターなども、実際に障がい者や子供をプロジェクトに加えることで、改修作業を行っていった。



◇アメリカでの UD

アメリカでの UD や GD の認識度合いは、まだまだ低い状態だが、徐々にニュースなどで報じられるようになってきた。

また、日本の自動車メーカーの取り組みに押される形ではあるが、ようやくフォードなどの米国自動車メーカーも UD に眼を向けるようになり、研究を開始した。

全米で特に UD に力を入れている業界としては、デザイン関係の出版業界であり、近年盛んに UD について取り上げられるようになってきた。これについては、日本も、もう少しデザイン業界に PR をしたほうが良い。

設計指針をつくる行政の諮問委員会では、これまで障がいを持った人達に対する「最低基準」と「最大基準」という言い方をしてきたが、近年では「最適化基準」ということを言うようになってきた。

◇ボストンのまちづくりへの参画

ボストンでは 1998 年から都市計画の一環として UD を取り入れている。

ほとんど予算がない状態からのスタートだった為に、時間がかかってしまったが、熊本はトップダウンでできたので効率的に行うことができ時間を要しなかった。

潮谷知事のような UD に理解あるトップに恵まれなかったが、アダプティブでは、建築士協会からの私的な補助などを得て、関連する人達でさまざまな討議を行った。

日本でのまちづくりは、どちらかというと行政からのトップダウンで行われるが、ボストンの都市計画策定については、UD のリーダーであるアダプティブが底辺からの意見を吸い上げ、提案を行い、行政からの理解を得て作っていった。

利用しやすい公共交通機関についてや、レンガを多用しているボストンの歩道について、「歩きやすい歩行空間」の検討など、様々なテーマでの検討



を行った。また、高齢者のグループでは「自分たちを迎えてくれる街」というテーマでの検討をし、取り入れられている。

また、この都市計画の策定の手法として、実際に現場に行って、自分たちや、そこに住む人にとって何が必要か体感・経験し、さらに車椅子での体験や、特殊ゴーグルを着用したりという手法で街を検証して、その意見を吸い上げ計画に取り込んでいった。



こういった 8 年間の努力が報われ、アダプティブは都市計画の意思決定の一員として参加することが可能になった。

UD を都市計画のレベルで取り入れることは十分に可能であり、障害というのはそれを取り巻く環境によって左右されるため、都市レベルで投資を行い UD 化していくことは価値あることだと考える。

アダプティブには、これらのまちづくりを勧めるだけの知識とノウハウをもっているという絶対的な自信が見られた。

また、UD の都市計画についてはインターネットにより事例をたくさん取り入れることが有効な手段だとのアドバイスもあった。

●公正住宅法への対応

アメリカでは 1988 年に制定された「公正住宅法」を、1991 年に改正し、共同住宅を建設する場合においては、障がい者が利用可能であり、また改造可能なものとしなければならないという建築基準が決められた。これに伴いアダプティブでは、全米に対し公正住宅のデザイン・設計・施工のリソースセンターとして専門スタッフを抱え、コンサルティングを提供している。



1988 年に制定された公正住宅法から、複数の世帯が入居する複合住宅では、障がい者に対応するための基準として、次のような 7 つの設計・施工についての規定が定められた。

◇公正住宅法で定められる障がい者への対応

- ① 出入り口についてアクセシビリティを確保
車から玄関まで自力で移動できる環境を確保する。
- ② 公共使用空間へのアクセス
エレベーターホールなど共用部分について外部の人間もアクセスできるように規定。
- ③ 障がい者でも使用可能なドアの設定
建物内のドアについて最低 32 インチ(約 81.3)幅を持たせる。
- ④ 建物内の通路幅員
共用部を含む廊下の幅について最低 36 インチ(91.5 センチ)幅を持たせる。
- ⑤ 電灯スイッチやコンセントへのアクセス性
車椅子の方の利便性を考慮した高さ。
- ⑥ トイレ・風呂の壁は手すりを取り付け可能なだけの強度を有する。
必要な範囲に手すり取り付けのための補強を行う。
手すりの設置義務はなし。
- ⑦ キッチン・バスルームの利便性
車椅子での利用ができるだけの広さを有している。

また、1991 年に改定された公正住宅法では、障がい者への対応として、次の2つの修正項目が加えられた。

- ① 盲導犬などが必要な場合の対応
動物の飼育を不可とする賃貸借契約を修正する権利を有する。
- ② 必要とされる物理的な改修の申請をすることができる。
手すりの設置や車椅子用のランプを設置するなどの改修について、改造不可とする賃貸借契約を修正する権利を有する。

しかし、これらの規定が適用となるのは、あくまでも 4 ユニット以上のアパートで 1991/3/31 以降に建設されたものが対象であり、アメリカでの主流である戸建住宅は対象外となる。

私達にレクチャーしてくれた、バーバラ・チャンドラー氏 (Barbara Chandler) によると、公正住宅法は最低限の法律であり UD のようなものではないと言う。

●アダプティブ・エンバイロンメントでの気づき

正直お恥ずかしい話だが、私はアダプティブを視察したことで、以前は UDについて表面的にしか理解していなかったと痛切に感じた。根本的な部分の理解が足りないと…。

たとえば数年前、ある知人がビジネスホテルの「禁煙ルーム」について「愛煙家にとってはユニバーサルデザインではない」と冗談を言ったことがあった。一種の屁理屈じみた笑い話であったが、研修に参加する以前の、しかも自らが愛煙家の私は、「禁煙ルーム」が好ましいもので、愛煙家は「我慢するべき」と言うことを、「常識」として判断していたが、ユニバーサルデザインの観点で考えた時、「すべての人に対して」を「嫌煙家・愛煙家を問わず」と置き換えて考えると、何故「禁煙ルーム」なのかと聞かれてもその根拠を示すことができなかった。

こんな素朴な、しかも子供じみた疑問だったが、今回のフレッチャー所長からのレクチャーの中で、「身体的・精神的な機能が低い人に焦点を合わせたデザインをすることで、健常者に対しても使いやすい。」という一言で解決することだった。

また、現在いわきにおいて、精力的にまちづくり活動に参加する私にとって、ボストンの都市計画策定でのアダプティブの取り組みには、心から共感することができた。さらに 8 年にわたり、生活者の目線に立ち、地味で地道な、しかも利害関係者の思惑が交錯すると予想される大変な作業を、貫き通したその取り組みに対し、感動と尊敬をして止まない。

フレッチャー氏のレクチャーの中でも、「日本は行政によるまちづくりが多い」と言う言葉があったが、P·I(パブリック インボルブメント)の手法を取り入れた形で、行政と市民団体との協働によるまちづくりを進められる現在でも、行政サイドから「鉛筆はこちらが握っているから、余計なことは言うな」と脅迫めいた事を言われ非常に不快に思ったことも事実。

私達市民の行う地味で地道な活動が、長い年月を持続することで、いつか行政からの理解を得て、一つ一つ実現していくことを心から願って止まない。

最後に、今回の米国視察において、引越しの真っ只中にも関わらず、ツアーを企画してくれ、各所に同行してくれた、フレッチャー所長、メアリー・アン氏、クリス氏、井上氏をはじめとするアダプティブのメンバーの方々に、この場をお借りしまして深く感謝を申し上げます。

ありがとうございました。



観察先別レポート No.7

シティー・スクエア公園**チャールズタウン・ネイビーヤード**

報告者:佐藤 玲子



この一帯は、ボストン滞在中たいへんお世話になった、アダプティブ・エンバイロメンツが、全面的に計画、デザインガイドライン、個々の公共・民間開発



のユニバーサルデザイン導入に関わった、ボストンで史上最大規模と言われた、サウスボストン・ウォーターフロント開発プロジェクトのなかで、チャールズタウンと呼ばれ、北部に位置します。計画にたずさわったアダプティブ・エンバイロメンツのクリスさんが同行、解説付のせいたくな行程で、「この案内板は低くて水平で、子どもでも見やすいでしょう。」のことばには、説得力がありました。

● シティー・スクエア公園

シティー・スクエア公園は、緑の芝生と赤いレンガの曲線の歩道からなる、衛星写真中央左の公園がそれです。4,000 m²ぐらいの小さな公園で、衛星写真で見ると、近くに車が忙しく行き交うチャールズタウン橋や、その姿が美しい吊橋:レオナルド・Pザキム・バンカーヒル橋があり、8車線もあるニュー・ラザーフォードアヴェニューと4車線のチャーチ・ストリートの交差する位置にあり、そのわりには、そこだけが静けさをたたえた公園でした。

チャールズタウン・ヒストリック・マーケット・スクエアの一部にあり、1629年の造営です。その後、1901年に高架線で鉄道が通るまでの、18・19世紀にかけては人々が集うにぎやかな場所としてその存在を示しました。20世紀半ばには、トбин橋からの交通が混雑するようになり、同じく高架線の高速道路

視察先別レポート

が公園の上に建設されました。その後1990年代半ばに、一帯の再開発整備に伴い、高架線だった高速道路はトンネル建設で地中化され、今日ある姿になりました。

今日ある姿に造成されたときに出でてきた、独立戦争時代の埋蔵文化財のこ



とや、このシティ・スクエア公園一帯の今日に至るまでの歴史を記した案内板が、円形の芝生にマッチするように心憎くデザイン化され、配置されていました。

またこの公園の中央に、空中高く鳥が羽ばたく、かつての高架橋を彷彿とさせる高さのあるモニュメントがあり、足元部分は魚があしらわれ水を湛えていました。ほかにも、魚をモチーフにしたアートワークがあり、数々の彫刻に抱かれ、水と芝生の緑と歩道の透水性の赤レンガから構成された、まちの人々のちょっとした癒しの空間“オアシス”的なたたずまいになっていました。

ボストンでは、歩道で点字ブロックと見まちがえたレンガの凹凸と、道路さえも斜めに横断する赤いライン：フリーダムトレイルに沿って歩くと、全長4km16ヶ所の独立戦争の史跡を巡ることができるようになっていますが、この公園をはさんで、北（写真左）に、フリーダムトレイルの終点のバンカーヒル記念塔が見え、振り向ければそれと対称するように南（写真右）に、記念塔のシルエットを踏襲し、ケーブルで支える橋としては世界一の幅（10車線）を誇るという、そのケーブルの織り成す機能美の美しい、レオナルドP.ザキム・バンカー・ヒル橋が見え、

この両雄姿を一度に見ることができるビューポイントにもなっていました。



<気づいた点>

○ 良いなあと思ったところ

右の写真を見てください！

- ① 「緑の芝生にいだかれたら、どんなに気持ちがいいだろう！」誰だってそう思うはずです。その誰もがいだく自然な思いをかなえてくれているのが、これです。赤レンガの歩道からスロープで、芝生にアプローチできるようになっているのです。芝生の上を車椅子で移動するのは、少々コツが必要そうですが、気持ちがいいに決まっています。みんなの公園ですもの。
- ② 歴史を記した案内板が、円形の芝生にマッチしていて、それだけでも美しく思えたのですが、これが設置高さが低く水平になっており、子どもや車椅子の人でも、容易に見ることができるようにもなっていました。



<福島県でこれからできること>

もうそろそろ世の中は、ハコモノ行政を期待してはいけないときになってきているのだとしたら、県庁東のもみじ山公園でいいです。シティー・スクエア公園と同じぐらいの広さかもしれません。もうちょっと勾配を緩和して、だれもが憩える公園にしませんか？議会中の県会議員の方と意見交換ができるかもしれませんし、音楽好きな知事と一緒に歌を歌ったりして。

● チャールズタウン・ネイビーヤード

チャールズタウン・ネイビーヤードは、衛星写真中央右のあたりになります。ボストン中心部から北へ、チャールズ川を渡ったところにあります。1628年にできたチャールズタウンは1つの町でしたが、1874年にボストン市に併合。1974年にチャールズタウン海軍造船所が閉鎖され、そのうちの30エーカーが、ボストン・ナショナル・ヒストリカル公園の名所に加わりました。

ハーバーには、USSコンステイティューション号が係留されています。USSコンステイティューション号は、1797年のアメリカ初の就役軍艦として進水、以降1812年の対イギリス戦まで40数戦の不敗記録を続けたアメリカ海軍史上最有名な軍艦だそうです。1976年に修復され、アメリカ海軍の象徴として海軍造船所に停泊保存されています。

船内外には、セーラー服にマリン帽姿の現役の海兵隊員が立っていて、空港・市役所についてここでも、セキュリティチェックがあり、ちょっと戸惑いました。

愛称 “オールド・アイロンサイズ” と呼ばれたという黒々とどっしりとした船体に、白いマストがりりしく空に伸び、帆を風に広げた勇姿はどんなであつたろう、と往時が偲ばれました。



視察先別レポート



碇を上げたら、今にも波間に進んで行きそうでした。また、船体には戦時の流れ弾の跡も見られ、独立戦争とは言え、そんなに昔のことではないのだ、と思ったのでした。USSコンステイチューション号は、フリーダムトレイル15番めの史跡となっています。

<気づいた点>

○ 良いなあと思ったところ

右の写真を見てください！

- ① サウスボストン・ウォーターフロント開発プロジェクトで、アダプティブ・エンバイロメンツのクリスさんたちが提案されたのでしょう、この透水性レンガの歩道は、ビーコンヒルで体験した当時のままのガタガタのレンガと違い、歩きやすく車椅子のイヤヤのタッチもスムーズでした。幅も車道並みに広い。
- ② USSコンステイチューション号へのアクセスも、ハーバー護岸ー1m ほどの海上一船上デッキへとスムーズに移動できるようになっていました。気づくと電動車椅子のクリスさんがそばにいて、驚かされました。



<福島県でこれからできること>

盆地の福島市に住む私が言葉にするのは、無理があるかもしれません、例えば、いわきのアクアマリン近辺とかに、こんな詩情豊かなハーバーウォークが楽しめるコースがあつたら、素敵だな、と思いました。建物が点として存在するのではなく、点をコアにもっと線や面となって、まちづくりが進んでいけばいいのに、と思いました。



それについても、市役所で見た、広い部屋いっぱいのあの圧巻の都市計画の模型が、そのプロジェクトにたずさわる人々にとっても、市民にとっても、これからわがまちわが市がめざすヴィジョンを、目の前に具体的に共通認識することができ、その全容を見る能够だけでも、何ごとかを雄弁に語りかけているように、私には思いました。これからのまちづくり、都市計画には、模型はなくてはならないアイテムだ、とつくづく思いました。

視察先別レポート No.8

スバルディング・リハビリテーション病院

報告者:曾我 啓子



スバルディング・リハビリテーション病院は、独立した外傷性脳損傷・脳卒中治療と甦生の分野を研究している全米でも有数の病院です。

交通アクセスがよいに、水辺にも近いという好環境のため、患者はボストン市内に留まらず国内のあちらこちらから集まっています。ただ、建物が老朽化していること、敷地が狭いことから、移転を打診されているようで、建て替え時にはアダプティブ・エンバイロメンツが関わりユニバーサルデザインに配慮したものにしたいとのことでした。

リハビリには家族の関与も進め、リハビリチームは患者と家族とともに特定の治療活動で援助する方法を伝え、退院後も患者と家族を助けるサービスをしています。

アメリカは自由時間を利用してレクリエーション療法をします。リハビリ専門病院にするには1日3時間の対応が必要だそうです。

以前はどんなことに興味があったか、様々な器具を使い彼らの改善のためにゴールを達成するのを応援します。リハビリ患者が今までやっていたアクティビティーで身も心も回復機能を増やします。例えば料理が好きな人は、釘を打ち込み改良されたまな板を使いリハビリします。団員もご馳走になりましたが、患者さんの毎日のティータイムには美味しいクッキーがでるそうです。また、映画を見に行く楽しみのある患者には、障がい者用の道路・階段のスロープは大切なので社会の支援も欲しいとのことです。また、ペットセラピーも大切なことで、犬を飼っていた人は病院の犬を可愛がる事でリハビリになります。



これらの治療を受けるに当たって、低所得者に関しては州が医療費を負担してくれます。

入院患者が180名いるこの病院で、働くスタッフについては、医療専門スタッフが50名程度、看護助手が40名程度、療法士120名程度、その他事務部門のスタッフがいるとのことで、医学療法士は多いがセラピー療法士が少ないのが現状です。

●参考になった話

<ジュディ・ウォーターソン理事長の話>

1980 年代からリハビリに専念してきて自分には最適の仕事だと思います。看護師として痛み・死…いろいろ見てきたので経営が出来るのだと思っています。

リハビリは看護師・療法士・家族・本人のコミュニケーションで全体の力を発揮してはじめて回復になります。毎年、新入生にボールペン・メモ帳を渡し、1週間後には病院の中の改善点、良い点をメモする事が義務づけられています。もちろん心構えも書いてあります。

<オズワルド・モンデジャ一人事部副部長の話>

生まれつきサリドマイドでした。13才の頃は仕事をしていました。25年前にシェラトンホテルの人事の専門をしていて、当時、上司に「場所じゃなくサービスだ」と教えられました。我々は仕事をどうやるかじゃなく、仕事をどう達成するかだ、社会に対して自分が貢献できるかそこを考えなさいと、障がいを持った人がどれくらい社会から必要とされるか考えなさい。医療現場の違いは患者の立場として考えないといけないから、患者がどういう事を望んでいるか理解しないと伸びない。我々はサポートグループを作り、再就職の事を考えなければならない。障がい者が如何に就職出来るか、暖かい手を差し伸べてもらうにはどうしたらいいか考えている。アメリカは障害者法がありオープンに話せるから自分の障害に合わせて仕事が出来るし、自分に合った使いやすい道具を用意してもらえば仕事はこなせる。障がいを持った人が仕事をするにも1人500万円以下で道具は揃います。そういうことよりその本人の能力が生かされればこんな素晴らしい事はない。本人の能力を重視、その人の採用された時の仕事の内容で自分に出来る事はやって、出来ない事は頼む。それをやる事でパートナーシップが生まれる。

●福島県では

福島市には二つの病院に回復期リハビリテーション病棟があります。

この病棟においては、次のような取り組みがなされています。

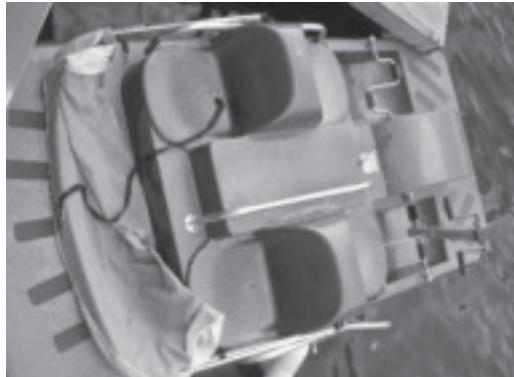
・理学療法 それぞれの職場復帰のリハビリのために、本人に合う器具等を作ったり、駅などの人混み歩行・自動車学校での試運転等の試みをします。

・作業療法 一般的な家事の仕事が出来るように台所はもちろん、畳の生活指導もおこないます。また、退院後も生活がしやすいよう、患者と家族を交えて家屋調査をして、本人の自立に向けて最大のケアをしています。

この病院は今まで0才から101才までの患者さんが利用しています。

県内の医療水準は他県と比較して低いと言われている現況のもとで、「施設から在宅へ」と変化している社会のニーズに対応するためにも、福島県でも症状別リハビリ病棟が増えることを願っています。

●リハビリの内容について



湾に沿って病院が建ててあるので、ボートを漕ぎながら水面から見る景色や青い空・頭上をまたぐ道路を走る車の音・周囲に咲くお花などを楽しんでリハビリします。



病院の建物には横に長いロッククライミングの設備がしてあります。
縦よりも力が掛かり難く、危険性の少ない横進みでリハビリをします。
スタッフは、後ろにまわり患者の安全を確保します。



屋外用リハビリ自転車はどれもが療法士と一緒に2人乗りでした。

視察先別レポート No. 9

ボストン公共放送 WGBH

報告者: 村松 穎



1. WGBHでは

メディアの一つであるボストン公共放送WGBH(以下 WGBH)は聴覚や視覚に障がいがある人にテレビやラジオ番組情報を提供している地元放送局である。

アメリカのADA法(The Americans with Disabilities Act アメリカ障がい者法 1990 年公布)の中に“耳の不自由な人のためにコミュニケーションの方法を確立する”と謳われており、この不自由な人のために便宜を図っている。

また目の不自由な人に対してテレビがどんなことをしているのか、内容を副音声で情報を流すサービスも提供している。字幕は録画の娯楽番組、生放送のニュースやスポーツなど全ての番組に提供されている。

写真のように大型テレビや一般的のテレビの画面下に字幕が付いて内容がわかるようになっている。アニメにも字幕が付けられている。

ニュースなどはリアルタイムで字幕が付けられていた。

字幕の始まりは30年前(1970 年)である。耳の不自由な人のために音声を字幕にすることを開始した。ところが字幕があることによって料理番組の手の動きが見られないということもあり、字幕付きと字幕なしを選択できるシステムを 1980 年初めに完成した。テレビの中にデコーダー(変換装置)を取り付けることによってリモコン(CC ボタン)により字幕の表示切り替えが出来るようになった。この動きを受けて、連邦議会の法律によって1993年に全てのテレビにデコーダー設置が義務づけられた。



2. 字幕は

字幕表示は耳の不自由な人ばかりでなく以下の効果も期待できた。

多民族国家であるアメリカにおいて

- 英語を得意としない人や発音になまりのある人などが発音と字幕を対比して確認できる。また教育現場で活用できる。
- 音声情報がよく聞き取り難い騒音の多い場所では字幕で情報を得られる。
- 音声情報はすぐ消えてしまうが字幕があることによってそのときの情報内容が正しく確認できる。

などである。

字幕技術が早期に導入できたのはアメリカの裁判所の証言記録のリアルタイムがもとになっており、その技術を利用できたという利点があったからである。

右の写真はリアルタイムで字幕を製作するタイプライターである。ギターのコードのように、特定のキーを組み合わせていくことで、単語が表示されるようになっている。特に午後4時から午後8時がニュースなどで忙しい。



事前番組は字幕製作の時間的余裕があるので右の写真のようにビデオテープに起こしパソコンのキー一ボードで字幕を作っていた。

音声を字幕にしてテレビに届けるまで3秒かかる(キーボードからパソコンで変換し衛星に発信しテレビへ)。更に短縮するために研究中ということであった。



視察先別レポート

誤字は1%以下。一分間に200字以上になると誤字があるので課題となっている。字幕内容によって訴訟になったことはない。事前に“内容についての責任は負いかねます”と伝えてある。将来はパソコン技術で音声からリアルタイムに字幕にしたいがまだ日常的にはなっていない。

日本では日本語を電波の中に入れるのに難があるがデジタルテレビならば容易になる。

3. 映画

字幕のない映画を見るために映画館の後方に電光掲示板を設置して、各自の黒色透明ボードに字幕が映り、前方のスクリーンの画面を見ることが出来るサービスを提供しているこの装置は全米の272館で設置されており、その映画は100本以上ある。

右の写真は映画館の後方にある電光掲示板の文字で、黒色の半透明ボードに映させるため反対になっている。

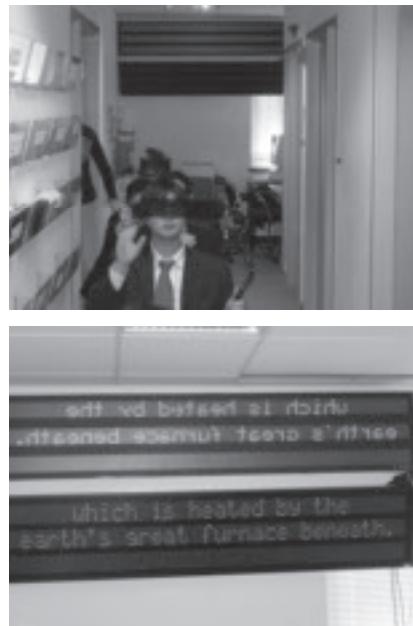
災害時の対応について、日本のNHKは国の予算や視聴者の受信料で運営しているが、WGBHは財団によって運営されているため災害時の放送はない。放送内容はニュース番組が多い。災害時の情報は民放から情報を得る。災害時になると全ての民放が字幕のテレタップを流す。目の不自由な人には対策がなく現在どうするか考えられている。

WGBHは耳の不自由な人ばかりでなく、目が不自由で映画を見ることが出来ない人に対して1980年後半から映画音声に加えて、今、どんな内容で、どんな情景なのかを副音声で情報を流している。これには感動した。その他、感覚障がい者に対してインターネットでも取り組んでいる。

4. その他の事業

WGBHの事業は放送ばかりでなく

- 目や耳の障がいのある方への技術開発に力を入れているほかに、アクセスを高める工夫。デジタルの映像に字幕を入れるソフトを二つ開発した。
- インターネットによる感覚障がい者へのアクセス方法の促進。
- 耳の不自由な生徒への教育現場での教材や読解力を高めるための事業。



- 目の不自由な方への音声による情報ガイドの無償提供。
- 有償であるが大学の講義やその他の音声データを変換して内容を再現する文字情報のサービス。
- コンピュータ会社と提携して技術や要望などの提案。(文章を音声にしてくれるものとか)
- 行政との関係や新法律とのかかわり、アクセスの保障。
- インターネットの映像で字幕がないものをインターネットでの配信。
- ラジオ番組のテキスト化要望があるのでインターネットでの文字情報配信。

以上のことも実施している。

WGBHは公共放送なので広告はない。ただしスポンサーがいる。そのため“この番組は△△スポンサーによって作成している”と情報を流す。

WGBHはロサンゼルスにもあり、スタッフが80人いる。ボストンではリアルタイムグループは25人、事前番組グループ25人、技術関係25人、総務関係25人で構成されている。

最後に字幕、その他いろいろ研究開発しているので番組技術、ハイテク、新しい試み、事業展開などに活用して欲しいということであった。

5. 観察後の感想

私は難聴者であるためにアメリカでのUDではどのように対応しているのか関心があった。WGBHを観察して“ここまでやってくれているのか”と想像以上の感動を覚えた。アメリカの問題意識の高さと、それに向けてのフットワークの良さに身の引き締まる思いがした。ただ災害時の情報が流されないということは意外であった。地震大国日本の方がこの点について努力しているのかとも思われた。同じ目的で動いても風土によって強弱がある。

日本でも字幕放送は開始されているが民放を含めまだ十分とはいえない。高齢化社会になり耳や目の不自由な方が増えていることを考えれば是非配慮しなければならないことが課題である。耳の障がいは外見上わからないためになかなか理解されない傾向がある。このことは福島県だけ出来るものではない。福島県を発信地として理解・啓発を全国に広げ、大きなうねりとなってアメリカ並みの実現に向けて歩んで行かなければないと感じた。

視察先別レポート No.10

トマス・クレーン公共図書館

報告者: 藤島 卓



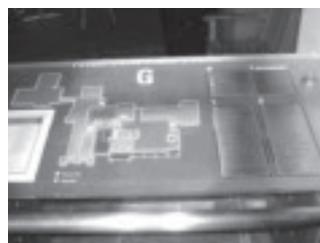
ボストンにあるトマス・クレーン公共図書館は、ボストンダウンタウンの西方にあるバック・ベイという地区に位置します。この図書館は、ボストンで一番古い図書館で、1882年に建設されました。建設当初は、大きな建物ではなかったそうですが、利用者が多いため増築したそうです。現在は、一日に約1200人の利用者がいるそうです。建物の外壁は、全体的にごつごつした石でできた造りでした。窓枠はアーチの形をしていてレンガでできていました。全体的に歴史を感じるデザインでした。



増築部分との境には昔の外壁がそのまま使われている。

1 参考になった点

館内を案内する見取図は、カラーで誰もが見やすく、目の不自由な人のために点字で説明されてありました。また、受付は身長の低い人や車いすの人



点字と音声による案内をする館内見取図



でも利用しやすいように、カウンターが低い位置に設置されました。



1階の出入口ドアには、車いすの人がスムーズに入りできるように車いすマークを押すとドアが開くようになっていました。さらに、1階と2階のフロアには一切段差がありませんでした。そのため、足の不自由な人は移動しやすい構造になっていました。

2 改善してほしい点

UDの視点から見て改善してほしい点は、古い図書館は、通路が狭く、人とすれちがうことが困難なところがあるので、車いす同士でも容易にすれ違うことができる広さが必要だと思いました。一方、新しく増築された図

書館は、エレベーターが小さく地下1階から地上1階までの利用しかできないので、2階まで上がるようにしてほしいことと複数の車いすにも対応できるようにエレベーターの中を広くしてほしいです。早期にバリアフリーの工事をしたほうがよいと思いました。

3 福島県での展開

福島県に限らず、日本全国にある図書館をはじめ、さまざまな公共施設や商業施設などは誰にでも使いやすい造りにするため、設計段階からUDを取り入れてほしいです。そのためにまずは、通路は段差を無くしてフラットにし、車いすの人が安全に快適に利用できる広さを持ったエレベーターや車いす用のエスカレーターなどを充実させてほしいと思いました。

視察先別レポート No.11

ハーバード大学

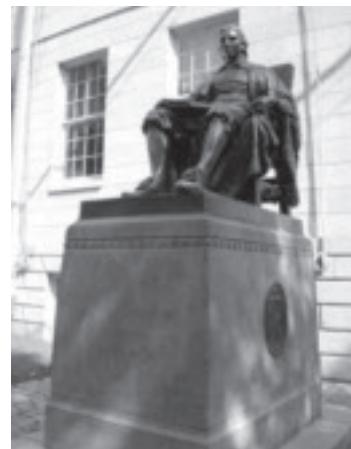
報告者:阿部 美咲



ハーバード大学は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ケンブリッジにあるアメリカ最古の私立大学で、過去に7人のアメリカ合衆国大統領を輩出している他、ノーベル賞受賞者を多数出す(1974年以来19人の教員が受賞)など、世界トップの研究機関のひとつです。ハーバード大学に入学した学生は、1年次をハーバードヤードとその周辺にある寮で過ごし、2年次から4年次卒業までを「ハウス」と呼ばれる12個あるシステムに属します。それぞれのハウスには、専攻、学年、人種の違う学生が400人ほど集まり、専任の教員のもと指導が行われています。また、ハーバード大学の学生の専攻は、他の大学とは異なり major とは呼ばず、concentration と呼ばれています。その他、他の大学とは学期試験の時期が異なるなど、ハーバード大学独自の方式や伝統が見られます。

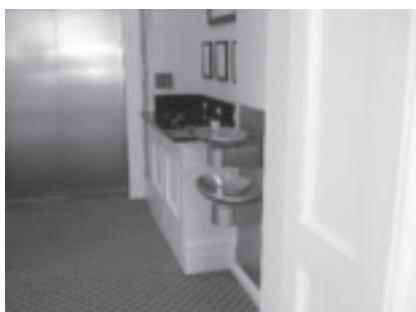
視察先別レポート

ユニバシティーホール の前にはハーバードの座像があります。この像はワシントンDCにあるリンカーン像を製作した作者によって 1884 年につくられたもので、台座に「ジョン・ハーバード、1938 年の大学創設者」と書かれているため、3つの嘘の像とも言われているそうです。この像のモデルは、1884年作製当時の学生です。また、像の脚先に触れると幸運が訪れると言われており、この像の前にはいつもたくさん観光客で賑わっています。



●気付いた点

ハーバード大学を囲む町並みは、歴史を残すことを重視しているせいか、道がレンガでぽこぼこになっていたり歩道と車道に段差があつたりと、車道に下りる際に車椅子の人が大変そうでした。しかしハーバード大学の敷地に入ると、目立った段差は見あたらなく昔ながらの伝統的な建物を保存しながらもユニバーサルデザインうまく向き合っているなど感じました。緑も多く安らぎの空間でした。



●福島県での取り組み

ハーバード大学は、世界中から学生が集まっていたり多くの著名人を輩出した大学を一目見ようと観光客がたくさん訪れてきます。そのため、NPO や行政などと連携して建物の改築に UD を導入しているそうです。福島県も、といった機関と連携して、今まで以上に UD にあふれた街に改善していくならと思います。

視察先別レポート N.12

地下鉄(オレンジライン)、バス

報告者:江連 香織



全米最初でもあるボストンの地下鉄、通称「T」は、マサチューセッツ湾交通局(MBTA)が管理・運営を行っています。レッドライン・ブルーライン・オレンジライン・グリーンラインの4路線があり、ボストン市内・郊外を走っています。日本の地下鉄同様、車体や駅の案内板の色が路線の色に統一され、分かりやすくなっています。そして、およそ半分以上の駅でエレベーターが設置され、車いすでの利用が可能になっています。駅ではホーム上にスロープを設置し車両にブリッジプレートを渡して乗車する方式を取り入れています。またホーム側に車椅子乗降用リフトを設け車両側はステップ部をふさぐラップドアを乗務員が操作するという解決法を取っているものもあります。

地下鉄は、ADA法の関係で低床型車両が推進されています。それは既存の駅・車両を持つ事業者に対して、頭痛の種になりえることです。しかし、ADA法では One car per train rule という逃げ道が用意されており、要は、編成中に一両でも低床車があればADA法を満たしているとみなされてしまうのです。それによってすべての車両が低床ではないために車椅子ユーザーには、不便な面があります。ですが実際、私が乗車したオレンジラインの車両は、乗り込む際の段差もあまりなかったためスロープなどを使うこともなく、容易に乗車することができました。さらに、ボストン市内の地下鉄は障がい者の料金が無料だったため、お金を払わずに利用することができました。



視察先別レポート

バスは、全車両のほぼ9割がニーリングバスであり、最近ではリフト付バスも増やしています。しかし、全ての路線でいつでもリフト車が利用できる状況ではないことから、前日に乗車通告を受け、確実にリフト車を配車するサービスで対応しているようです。今回の研修中に利用したリフトバスは、普段日本で利用しているリフトバスとの大差はなく、固定の方法もベルトなどを使用していました。しかし、リフトを作動する際に、エンジンが止まってしまうというトラブルが起こる場合もありました。



視察先別レポート No.13

パトリック・オーハンズ小学校

報告者：河野 由美子



● アメリカの教育制度

アメリカでは、日本の文科省のような機関ではなく、各地方自治体が教育に力を注いでいる。

アメリカの義務教育は、州によって異なるものの、おおむね5歳から18歳までの13年間で、日本で言うところの幼稚園年長から高校3年生までが義務教育の期間である。

公立学校の運営は、州政府および市町村にゆだねられており、その運営の財源は、主に州政府からの補助金と地域住民の税金により賄われている。

マサチューセッツ州は、比較的裕福な地域であり、住民の教育への関心も高いため、教育予算となる固定資産税は大きな財源であり、地域住民の意思が大きく反映される。

実際の教育行政に関わるのは州の教育委員会の下に置かれている学校区であり、それぞれで独自の教育がなされているが、基本的な教育制度や教

育政策は各州で決定され、それに従い各学校区はカリキュラムの決定や教員の雇用等を行っている。

● 障がいのある子供に対する教育制度

アメリカでは障害者教育法(IDEA)により、0歳から21歳までの障がいを持つ子供とその家族は、最も制約の少ない教育環境において無償で適切な教育を受けることができる。また、個別教育計画(IEP)の導入により、医療・教育・家庭が連携をとり、通常学級において学力を高めるための様々な教育環境が保障されている他、16歳以上の生徒に対しては、卒業後の地域、職業への個別移行計画(ITP)の作成が明記されている。

0～2歳の障がいのある子供と家族に対しては、個別家族サービス計画(IESP)が提供され、早期教育にかかる教育的サービスの提供や、親へのカウンセリングなどの配慮が盛り込まれているほか、3歳～5歳の子供に対しても IEP が作成され、障がい児教育のサービスが受けられる。

● 統合教育の実践の様子を見て

統合教育を実践するパトリック・オーハンズ小学校では、全校生の33パーセントに障害があり、健常児と同じ教室で共に学んでいる。

私たちを玄関で迎え入れてくれたのは、ほぼ全盲の校長先生で、自ら校内を案内してくれた。

この学校の掲げるインクルージョンの教育理念に賛同する保護者は多く、ボストンでも人気が高いため、入学するのは至難の業であるという。

* 授業の様子

1年生1クラス22名の生徒のうち、障がい児は4名で、ダウン症や自閉症など、様々な障がい児を受け入れており、教員は担任1名、特殊教育専門の教師1名、補助1～2名で構成される。授業は健常の子供達と同じ教科を、個々に作成されているカリキュラムにそって行われ、専門の教師のもと、発達や能力に応じた教材を使って授業をすすめている。



視察先別レポート

* カリキュラムの作成

アメリカでは特別なニーズを必要とする子供を受け入れるため、学校には作業療法士や心理士など多くの専門家が配置されている。パトリック・オーハンズ小学校でも、個々のカリキュラムは、担当教師、保護者のか、専門家や医師が参画して作成される。

* 教材

コミュニケーションの手段や言葉の習得、あるいはスケジュールを把握するために絵カードが使われていた。ボタンを押すとイエス・ノーが伝えられる意思伝達装置や、バランス感覚を養うためのセラピーボール、座位が取りやすい机と椅子など、日本では養護学校や専門の機関でなければ見ることの出来ない教材や補助用具が普通に教室におかれている。教材を含め、学校全体がカラフルな色調を多く使っているのも印象に残った。



* 設備

中庭やグラウンドには、低学年の児童や、障がいのある児童への配慮として、床に柔らかい素材のマットが敷かれ、転倒や遊具からの落下に備えている。

教室にはトイレがあり、排泄の訓練が可能な環境が整っている。



* 校長先生の教育理念

障がいの有無に関わらず、子供一人ひとりの存在は異なって当たり前である、というインクルージョンの基本理念にそった教育は、子供だけではなく、親や教師にとっても学び、向上していける場である。全校生の33%に障害があるという事実は、学力の面では他校と比較したとき不利ではあるが、学校を学習のコミュニティーとしてとらえることで、子供達同士のふれ合いから様々なことを学んで欲しい。

* 保護者の思い

障がいのある子供達と一緒に学ぶことは、子供達がサポートの仕方を学ぶ良い機会である。また、このような学校では親も教育に携わることができ、親と教員、そして親同士のつながりを築く場にもなっている。

● 観察を終えて

インクルージョンの教育が行われている現場を始めて見て、障害があっても、教育の力で個々の力を最大限に伸ばし、自立させていこうという、アメリカの強い教育の理念に感嘆を覚えた。

福島県では、「地域の中で、共に学び、生きる力を育む」を基本として、特別支援教育が進められている。県内の公立小・中学校に特別支援コーディネーターを配置し、障がいのある子供達が地域の学校や通常学級で学べる教育環境を整備するなど、インクルージョンの推進が図られている。

昼休み、グランドに出てくる子供達は、ごく自然に車椅子を押していた。

この光景を見た時、ユニバーサルデザインを推進していく上でその土台となるのは、障害の有無にかかわらず、同じ地域、同じ環境で共に学ぶことのできる教育の場であると感じた。ユニバーサルデザインの意義やその必要性は、誰かに教えてもらうのではなく、言葉を越えたコミュニケーションや相手を察するという思いやりの心から生まれてくるものだと思う。

「ボストン研修を終えて」

県立福島西高等学校 2年 阿部 美咲



「ユニバーサルデザイン」? なんのことだ? と、2年前までまったくといっていいほどこの言葉の意味がわからなかつた私ですが、中学校のときに私の後輩が UD について発表しているのを聞いて、興味を持ち始めるようになりました。インターネットや本で自分なりに UD について調べていくうちに、一口に「ユニバーサルデザイン」といってもいろいろな観点があることに気づきました。そこで、もっとユニバーサルデザインについてアメリカの地を借りて探求したい、こんなに身近に感じる UD を周りの人々に広めたいと思い、この研修に応募しました。

年齢はばらばら、職業もばらばらで障がいを持つ人もたくさん集まつくるということで事前研修が始まる前は多少の不安がありました。しかしふたを開けてみると、皆さん UD についてしっかりとした意見を持っていておもしろくて親切で、1回目の事前研修のお昼を過ぎた時点で不安なんてものは消え去っていました。こんな素敵なおさんとともに研修ができる、誇りに思います。

ボストンに到着して最初に感じたのは、町並みが綺麗なことです。緑に囲まれた町、れんが作りの道路と家などなど、歴史を感じさせる建物がたくさん

あり、日本では見慣れない光景をたくさん目にしました。日本にあるような、点字ブロックはまったくなく道路の幅も広くて歩きやすかつたです。また、アメリカの国旗がいたるところに掲げてあるのが印象的でした。日本製の車が多く走っていることにも驚きました。

次に、障がいのある人を偏見していないところに関心しました。日本では、何かと障がいを持つ人を偏見しがちな部分が少なからずあると思います。しかしボストンでは、障がいがあることが当たり前のように接してくれて車椅子の方がバスに乗る際にリフトを使うときも、運転手の方が手馴れた手つきで操作していました。

4日目にスカルディングリハビリテーション病院を訪問したとき、リハビリのためにさまざまな工夫がされた道具を紹介していただきました。ペンをもつための手袋と固定するテープ、持ちやすいはさみなど、障がい者の視点か



ら考えたものがたくさん作られていました。今後日本でも、取り入れていけたらなと思います。

私が、訪問する前から楽しみにしていたのは2日目に訪れたニューイングランド水族館とハーバード大学です。

ニューイングランド水族館は、いわき市にあるアクアマリンふくしまのモデルとなった水族館ということを聞いていたので、福島とボストンとでつながりのあるアミューズメント施設だ！と、興味津々でした。

この水族館の設備には、とても感心しました。生き物の説明文は、高齢者や小さい子供を考慮して低い位置に設置してありました。また、いたるところにスロープがついていたりしてて誰もが利用しやすい設備、まさしくUDが多く取り入れられていました。

ハーバード大学は、段差が少なくスロープはもちろんエレベーターとエスカレーターも完備してあり身体が不自由な方でも1人で自由に動けるようになっていました。

今回は大学の学食を食べることができました。私は「学食」と聞くと食券を買ってカウンターに出すという庶民的なイメージを持っていたのですが、実際はまったく異なっていました。まず種類の多さに驚きました。パンだけでも、何十種類の数があり飲み物やサイドメニューも充実していました。ハ



ーバード大学で学食を食べられる機会なんて、もう一生ないことなので、とても貴重な経験ができました。

ボストンでの研修を終えて、日本で改善していかなくてはならない点がはっきりしました。それは、障がい者の雇用機会についてです。日本の社会は障がい者に対して冷たく、一般の人と同等の雇用機会を与えることはあまり見かけません。それに対してボストンは、ADA法という障がい者の人権を守る法律に基づいて、障がいを持つ人も積極的に社会に進出して働いていました。日本にもADA法のような障がい者を守る制度を設け、障がい者が社会に進出しやすい環境を作るべきであると考えます。そのためには、UDをもっとたくさんの人に関心をもってもらい、街をUDであふれた、住みやすい場所にする必要があると思います。

私はこれから、ボストンで学んだ事を無駄にしないように友達を始めとしてたくさんの方にUDを広め少しでも多くの人が関心を抱いてくれるように努力したいと思います。そして、福島を拠点として日本中がUDであふれた国となるよう微力ではありますが努めていきたいと思います。

最後に、事務局や団員の皆様、添乗員さんには大変お世話になりました。こんなにも貴重な経験ができた、とても欣幸です。ありがとうございました。



「この研修で私が得たもの」

県立郡山養護学校高等部 2年 江連 香織



1. はじめに

今回この研修に参加する動機となつたのは、私の通う学校の校長先生が、前回この研修に参加していたということからでした。校長先生は、この研修で学んだこと、驚いたこと、ユニバーサルデザイン(UD)についてのことなどを、お話しして下さいました。次第に私は、UDへの関心が高まり、応募することを決意しました。参加が決定してからは、自分の小枠の知識を少しでも広げるために、UDについての事柄を自分で調べ、勉強しました。それまでは恥ずかしながら、バリアフリーとユニバーサルデザインの違いさえ曖昧だった私には、初めて知る内容ばかりでした。

2. 事前研修にて

実際にボストンへ行く前の事前研修では、まず一緒に研修を行うメンバーに会いました。今回の団員の中で車椅子を使用しているのが私一人ということもあって正直、最初は本当に自分で良いのだろうか、団員の皆さんに迷惑をかけてしまうのではないだろうか、と不安で一杯でした。ですが団員の皆さんには、あっさりと私を受け入れてくれて、私自身も安心して研修に取り組むことができました。

3. ボストンでの経験

そして、いよいよボストンへ。自分の勝手な想像でボストンは福祉が凄く発展しており、何不自由なく暮らせるのだと思い込んでいた私を驚かせたのは、ビーコンヒルの街並み散策のときでした。歩道は石畳になっており、車椅子ユーザーにはどう考えても自走が困難な道でした。さらに、急な坂や段差などもあり、あまりにも想像していたものとの違いに唖然としてしまいました。けれど、ふっと周りの景色を見渡してみると、レンガ造りの家や街灯など昔の美しい面影を残しており、そこにはこの石畳がなくてはならないのだと思いました。



確かに、誰にでも使いやすいデザインにすることはとても重要だと思うが、その土地の文化や風習を壊してまですることなのか、そうではない。それらを出来るだけ保ったままで、いかに UD と共に存させていくか。それが課題なのではないかと感じました。

研修3日目に視察したボストン市役所では、ボストンでの UD の実施状況についてお話を伺いました。お話を

下さったスピネットさんは、「ボストンの街を車イスの方でも容易にアクセス出来るようにしたい。」と、おしゃっていました。ですが、ボストンの雪がたくさん降る気候や、精力的に政府への訴えを行っても資金の問題で拒否されてしまうといった現状で、とても困っているのだそうです。今日本でも障害者自立支援法の絡みで、福祉の資金について、とても大きな問題になっています。やはり、福祉の先進国と言われているアメリカでも日本と同じ問題点があるのだと感じました。

4日目の視察が終わりホテルに戻る際に、急遽バスではなく地下鉄を利用してホテルに戻ることになりました。日本では、車イスを利用している方が電車に乗る際、事前に駅に連絡をしなければなりません。ですが、この日はいきなり地下鉄を利用することが決まり、私は内心ドキドキでした。どんな電車に乗るのだろう…。乗せてもらえないかしたらどうしよう…。しかし、そんな私の思いは全く必要ありませんでした。駅には、エレベーターがしっかり完備されていて、すんなりとホームに行くことができ、改札ではなんとお金を払う必要もなく、なんだか拍子抜けでした。電車に乗り込む際にも、なんとスロープもリフトも使用することなくそのまま乗車することができました。あまりの感動に、実はその時のことあまり覚えていません(笑)。こんな風に日本も様々な交通機関に容易にアクセスすることが出来れば、車イスを利用している方々の行動範囲ももっと広がるのだと思います。

研修6日目。パトリック・オーハンズ小

学校を視察しました。まず私たちを驚かせたのは、この学校の校長先生自身が視覚障害をお持ちだったということ。それでも、なんら変わりなく学校を紹介して下さいました。この学校は全校生徒の33%が障がい児という統合教育を推進する学校で、障がいのある子もない子も同じ教室で授業を受けていました。しかし、テストの最高水準と最低水準成績の格差が激しく、学習のレベルもあまり高くなっています。



ですが校長先生は「生徒たち一人一人が向上していればそれで良い、重度の障がいを持つ子供も通常の子供と同じように学ぶ機会を持って欲しい。」と、おしゃっていました。この校長先生の言葉に何か胸に込み上げてくるものがありました。成績を考えることはもちろん大事なことだけれど、背が低い子、背が高い子、勉強が得意な子、勉強が苦手な子、障がいを持っている子、障がいっていない子、こんな風に様々な人がいるということを早いうちから知り、共に生活するということもとても大事なことだと思います。校長先生の思いの通りこの学校に通っている子供たちは、みんな生き生きしていてとても輝いて見えました。本当に素敵な学校でした。



個人別レポート

その他、この研修では毎日リフトバスを使用していました。車イスを利用する私のために、毎日運転手さんがリフトの乗降をして下さいました。運転手さんは毎日違う方でしたが、どの運転手の方も嫌な顔1つせず、毎日笑顔で対応して下さいました。この些細なことが私にとっては本当に嬉しかったです。街でリフトから降りる際に、通行人の方に迷惑をかけてしまったと思った時にも、街の方は「Can I help you?」と、逆に気遣って下さる方もいました。日本ではそんな時も見てみぬふりをする人や、迷惑そうな顔をする人もいます。しかしボストンの街にはそのような人は一人もいませんでした。ボストンの地では、福祉に対する心が隅々まで行き渡っていました。どんなに制度の改革だ!!と言っても、一番の要となるのはやはり人の心です。資金がない、制度が悪いと

言って、何を変えても人の心が変わらなければ何も変わらないのです。ボストンの福祉を直に感じ、改めて実感しました。

今回の研修では、自分の視野を広げることができ、自分の考えを持つことが出来ました。ボストンの地を訪れ、実際に感じた福祉はとても素晴らしいものでした。これらをいかに様々な人たちに発信し、実践していくかが、これから課題だと思います。

最後になりましたが、今回の研修にあたってご協力をいただいた、学校の先生方、事務局の方々、櫻井さん、ボストンでお世話になった方々、そして何より…一緒に研修を行った、団員の皆さん、本当にお世話になりました。そして本当に本当にありがとうございました。



「研修に参加して」

県立会津養護学校高等部 3年 大瀧 裕司



今回の研修のことは、学校からのお知らせを見てお母さんから話を聞いて始めて知りました。最初は研修の内容もよくわからず心配もありましたが、遠い国へ出かけて勉強することは自分にとってきっと良い経験になると考え、思いきって応募することにしました。決定の通知をもらったときはとても嬉しくて、家の人も喜びながら出発までの準備をすすめてくれました。

今回の研修では、水族館や大学、美術館や図書館などいろいろな建物を見て回りました。ボストンについていた日に最初に行った水族館は、とてもきれいな建物で、今まで見たこともないくらい大きな魚を見ました。館内のことについての説明も聞きました。その後のハーバード大学では、ジョン・ハーバードの像を近くで見ることができました。大学の中もとても広く、僕の学校の近くにある大学よりも広いことに驚きました。また、クインシーマーケットという場所でお昼にサンドイッチを注文しました。とても大きくて全部食べられるか心配でしたが、全部食べられてとてもおいしかったです。

また、ボストン美術館ではたくさんの絵や彫刻を見ました。特に、エジプトの大きな像を見たときは、顔の作りが珍

しくてしばらく眺めてしまいました。館内もとても広く、どの建物も車椅子の人が使いやすいようにできていました。ボストンは色々なものが大きいなと感じました。

ボストン市役所に行ったときには、ボストンの街の模型を見せてもらいました。全部木でできていって、とても素晴らしいかったです。

その後船に乗り、船から貨物船や飛行機も見えました。ボストンの良い景色を見ることができ嬉しかったです。

3日目に行ったアダプティブ・エンパイロメンツでは、たくさん話を聞きました。おみやげに学校のコースターも渡しました。コースターが喜ばれたので嬉しかったです。また、その日、地下鉄に乗る経験もできました。迷路みたいな入り口から入っていき、みんなと一緒に地下鉄に乗れたことが楽しい思い出になりました。



個人別レポート

4日目にはテレビ局と図書館に行きました。図書館も大きくて立派な建物でした。中にはパソコンやソファーがあり、もちろんたくさんの本がありました。車椅子の人のためのエレベーターもありました。僕が気に入ったものは、たくさんタイルが並べられているディスプレイです。

タイルの絵は子どもたちが描いたそうですが、みんなそれぞれに違った絵があってすごいなーと感じました。



テレビ局では、点字のついた名刺をはじめてもらったことがうれしかったです。きっと目の不自由な人が便利なのだろうなと思いました。

最後の日に行った小学校では、車椅子の人や足に器具をつけている人が一緒に勉強したり遊んだりしているのを見ました。ここでも、いろんな友達に会うことができて嬉しかったです。小さい友達がたくさん遊んでいてとても可愛らしいなと思いました。



ボストンの街をいろいろ見て回って思ったことは、建物が広くて大きいので、みんなが使いやすくていいなと思いました。小学校の建物も、日本の学校よりも大きくてびっくりしました。日本で僕たちがすごしている学校も、もっと広いといいなと思いました。

最後に、今回の研修で一緒に参加した人たちとずっと仲良くすごせたことが良かったです。さよならパーティーでの中華料理もおいしかったし、大好きなバスケットボールや車の本を買ったことも良い思い出になりました。学校に帰ってからも、バスケ部の友達と一緒に見ながら楽しんでいます。

みなさんに応援してもらって、この研修に参加することができてよかったです。本当にありがとうございました。



「『ユニバーサルデザイン研修』に 参加して感じたこと」

県立大笛生養護学校高等部 2年 桑原 了一



1. UDへの気付き

私が「福島型ユニバーサルデザイン実践リーダー研修」へ応募した理由は、アメリカと日本のユニバーサルデザインの違いを知りたいと思ったからです。

団員に選ばれたばかりの頃は、うれしい反面、アメリカという未踏の地へ行くことがとても不安でした。しかし、2回の事前研修に参加する中で、他の団員の方々とも交友が深まり、視察先の様子や視察のポイントについて話し合いを繰り返すうちに不安はなくなり、この研修への期待が高まっていきました。

この研修を知る前は、「ユニバーサルデザイン」という言葉は知っていたものの、正直言ってそれがどうということを意味するのかはわかりませんでした。そんなとき、担任の先生から、ユニバーサルデザインとは、子どもや大人、お年寄り、障がいのある人、みんなが使いやすいデザインのことを意味し、日常生活の身近なところにたくさんあることを聞きました。

そこで、クラスの友達と一緒に自分の通っている学校の中で探してみることにしました。私の学校には、車椅子の友達も多くいるのでエレベーターが設置されています。エレベーターでは、

ボタンが低い位置に設置され、音声で扉の開閉や階を教えてくれたりする機能がありました。また、車椅子用のトイレでは、手をかざしただけで水が流れるセンサーがついていました。その他にも、廊下や階段の手すり、プッシュ式になっていて力のいらない電気のスイッチなど、普段慣れ親しんでいる学校にもユニバーサルデザインがあふれていることを知り、とても驚きました。

2. UDが当たり前に感じたアメリカ

今回の研修では、マサチューセッツ州にあるボストンに行きました。赤レンガで造られた建物が多く、とても風情のある街並みが広がっていました。それは、日本で言えば、北海道の小樽にあるような赤レンガの家や建物でした。また、街中に緑がある、ふれ、とても気持ちが良かったです。



僕がアメリカに行って知りたかったことは、文頭にも書きましたが日本とアメリカのユニバーサルデザインの違いです。僕が見た限りでは、ボストンの街のどこを見ても必ず点字ブロックや、手すりなどが付いていたり、公衆電話も誰

個人別レポート

もが使いやすいように低いところに設置されていました。

また、バスや電車の乗り物にも手すりやリフトが付いていました。



僕は、二本松市に住んでいます。駅前周辺には点字ブロックや手すりが設置されていますが、自転車などの障害物が点字ブロックの上に当然のように置かれたり、手すりが汚れています。また、市内を走るバスや施設の福祉車両には、リフトや手すりが付いているものもありますが、すべてのバスや福祉車両に設置されるとまではいかないのが現状です。

これがごく自然に、当たり前のように設置されているところがアメリカと日本の違うところではないかと感じました。

3.『思いやりの心』を持って

この研修に参加して感じたことは、ユニバーサルデザインの考え方方が、初めからどんな人にも使いやすいデザインであるということです。子どもやお年寄り、障がいのある人など、それぞれに合わせてデザインされたものではなく、どん



な人にも安心・安全で使いやすいというところが素晴らしいと思います。これは、一言でいえば、「思いやり」であると思います。すべての人が思いやりをもって共に生活する社会が、ごく自然に営まれる世の中になればいいと思います。

ユニバーサルデザイン研修を終えて、今後取り組んでいきたいことは、もっともっとみんなさんにユニバーサルデザインについて知ってもらいたいということです。自分からユニバーサルデザインについていろいろな人に教えていきたいと考えています。今回の研修で出会ったユニバーサルデザインの器具などもたくさん製造、開発され、世界中に広がるといいなと思います。



そして、何よりも、人間一人一人が「思いやり」の心をもって共に生活する社会を築いていけるように、まずは自分から実践していきたいと思います。

最後になりますが、今回の研修に参加するにあたりまして、団長をはじめとする団員の方々、学校の先生や家族、研修を通じて出会った方々には大変お世話になりました。貴重な経験をさせていただいたことに深く感謝申し上げます。

ありがとうございました。

「ボストン研修視察に参加して

～統合教育について考える～」

東日本国際大学附属昌平高等学校 2年 直井 風子



1. はじめに

私は、このボストン研修に参加するまでは、ユニバーサルデザインとは何か知りませんでした。

担任の先生から、このお話をもらいユニバーサルデザインについて調べ、ユニバーサルデザインとは高齢者や障がいのある人など、特別な人だけを対象にしたものではなく、年齢、性別、障がいの有無、言語の違いなどにかかわらず、すべての人が対象であることを知りました。

また、ユニバーサルデザインとは何か知らない人が多いことを知り、この研修に参加して学んだことをいろんな人に伝えて行けたらと思い、ボストンへ行って様々なことを勉強したいと言う気持ちが強くなりました。

2. ボストンでのUDを見て

ボストンへ着くと綺麗な町並みが多いことに驚きました。

私が一番印象に残っているのは、ニューイングランド水族館。この水族館はボストンのウォーターフロ



ント地区にあり、水族館内にはいたる所にスロープがありました。

車椅子利用者や、足の弱い人でも見学しやすく、小さな子供でも水槽の中を見ることができるように踏み台がつけられていました。

この水族館が、いわき市にある水族館「アクアマリンふくしま」のモチーフとなつたことを聞き、驚きました。

次にボストン美術館では、足腰の弱いお客様には無料での車椅子の貸し出しが行われていました。また、補聴器の貸し出しありました。さらに作品に触ることができたり、写真を撮ったりもできるようになっていました。車椅子、補聴器の貸し出しについては日本でも行われているところが多いのですが、その以上のサービスがあることに感心させられました。

日本全国にある水族館、美術館、公共施設など多くの人が集まる場所も、これからは、誰でもアクセスしやすく、使いやすいユニバーサルデザインの考え方をもっと取り入れていけたらと思いました。



個人別レポート

そのためには、多くの人たちにユニバーサルデザインを広めていかなければならぬと思いました。

3. 統合教育について

次にパトリック・オーハンズ小学校への視察をして、統合教育について知る機会となりました。

統合教育とは心身に障がいをもつ児童生徒を障がいのない児童生徒と一緒に教育することです。

日本における文部科学省では、1997年度から交流教育地域推進事業の実施を全都道府県に依頼、地域や学校の実情に応じた多様で継続的な交流教育を推進しているそうです。

パトリック・オーハンズ小学校においては、1990年から児童の33%が障がいを持つ児童生徒と聞きました。

教室の中をのぞいてみると、障がいのある児童とない児童が、一緒に授業を受けています。

教室の中には3人の教師があり、障がいのある児童には専門



の教師が対応していました。

日本においては、障がいのある児童は、養護学校へ行くことが多いと聞いています。

統合教育が推進されれば、障がいのある、なしにかかわらず、共に生活を送ることで、障がいに対する偏見もなくなり、思いやりの心を養うことにもなり、障がいのある児童は、健常児からの良い意味での刺激を受けることになるよう思います。

障がいがあるからと言って養護学校に通わなければいけないという考え方ではなく、誰もが同じように同じ学校で教育を受けると言うことが、ユニバーサルデザインの考え方だと思いました。



日本でも統合教育が推進されていくことを願っています。

4. 最後に

今回のボストンでの経験を、学校、地域で、多くの人たちに話していくことで、ユニバーサルデザインの考えを啓蒙していきたいと思いました。

この度は貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

「ボストン研修視察に参加して

県立橘高等学校 3年 古川 あゆみ



私はこの研修で、アメリカの進んだユニバーサルデザインに触れ、その重要性を再確認することが出来ました。中でも特に3つの場所が心に残っています。

1つ目はスポルディング・リハビリテーション病院です。この病院は大変特徴があり、趣味や好きなことをリハビリに活かすという取り組みを行っていました。病院の前の広場には自転車やカヌー、さらにはロッククライミングの器具までがおいてあり、とてもリハビリ病院とは思えない光景でした。パッと見はおしゃれなアスレチックのような雰囲気で、そのような環境なら患者さん達もリハビリを楽しんで続けることが出来そうだと感じました。それに加え、行っているリハビリの種類も大変豊富で、釣り・料理・ボウリング・読書等、患者さん一人一人の趣味を取り入れ、より能動的にリハビリに参加して患者の QOL を高めるようなプログラムになっていました。私はリハビリといったら何か訓練のようなものを想像していたので、この病院にはとても驚きました。自分の好



きなことを手がかりにリハビリを受けられるのは患者にとってやりがいを感じていける、嬉しいことだと思います。高齢社会の日本でもこのような取り組みをする病院が増えればいいと思いました。

2つ目はトーマス・クレーン公共図書館です。バスから降りたとき、まずこの図書館の綺麗な外見に心を奪われました。まるで

少し古いお城みたいで、さらに周りは緑の芝生にあふれてい



ます。私は元々読書が趣味で、図書館という場所も大好きなので、ボストンの伝統的風景にマッチしたこのすてきな図書館には感激しました。この図書館は昔に造られた物なので、ところどころ UD にするために改装したところもありました。しかし、極力この外観を壊さないようにという配慮が見られていました。UD は設備の面のみを重視してしまいかちですが、見た目もみんなが利用したいと感じる上では重要なポイントだと思います。この図書館のように外観も含めたUDには良いセンスを感じました。また、図書館が地域からのニーズに応

個人別レポート

え、様々な活動を行っているのが印象的でした。例えばお年寄りの方や地域の人が気軽に集まれるホールやカフェを併設したり、親子で図書館を利用するように子供の図書がおいてある部屋の側に読み聞かせなどが出来るスペースをつくったり、親子専用のトイレなどがありました。お年寄りの方や車椅子の方でも移動しやすいように床にはほとんど段差はなく、図書スペースと廊下をカーペットの色で分けるなどの工夫も施されていました。



他にも本当にたくさんの細やかな配慮が行き届いていて、どんな人でも使いやすいようになっていて、ボストン市内の人々にとって自慢の図書館となっているようです。外観は歴史を感じさせる建物が、中身はとてもアクセスしやすく、常に UD を意識した作りになっていたので、私はこの図書館がとても気に入りました。このようなすてきな図書館が福島市にも出来たらいいなと思います。

3つ目はパトリック・オーハンズ小学校です。学校の33%が何らかの障がいを持った生徒だと伺いました。しかもこの小学校は障がい児を受け入れるための特別な学校ではなく、一般の学校です。日本では一般的の学校には障がいを持った生徒がほとんど見られません。この学校はアメリカの中でも特に進んでいるらしいですが、アメリカと日本はこれほどまでに受け入れる態勢が違うのだなとしみじみ感じました。私

が日本の学校と違うと感じた部分は、少人数学級と教室にいる教師が多いことでした。25人ほどの生徒に先生が2, 3人はつくようになっています。それが障がいを持った児童へのきめ細かい指導を可能にしているように感じました。この仕組みは日本でも学べる点



があるように思います。障がい児と共に学ぶことで、生徒に互いに助け合う心が生まれたとおっしゃった保護者の方がいらっしゃいました。共に学ぶのは時には難しい場もあると思います。しかし、それ以上に共に教室にいることで得られる物もたくさんあるのだなと気づきました。障がいを持った子も共に学べる学校を日本でもつくっていって欲しいです。

この他にも挙げたらきりがないほど新たな発見や感動を経験することができました。この研修全体を通して自分の中で最も感じたことは、アメリカでは障がいを持っていても生き生きと生活していらっしゃる方が大変多いということでした。アダプティブのクリスさんを始め、病院の人事部長さん、校長先生等、たった一週間の中でも、障がいと共に生活している方々とたくさんお会いする事が出来ました。障がいを持っても職に就き、また職場で昇進の機会が等しく与えられる。それは本当に当たり前のことです。しかし日本ではその当たり前のことが当たり前になってしまいません。日本では今後ますます高齢化が進み、なんらかの障がいを持った人はさらに

身边になっていくでしょう。その中で就学、就職等の機会でもUDが広まっていかなければいけません。私はアメリカに行きそのことを初めて心から実感出来たと思います。今後は出来ることから少しずつ社会の中でUDを増やしていこうと思います。

最後に、研修を支えてくださった県庁の方々、そして一緒に一週間過ごした仲間に感謝したいと思います。私がこれほど充実した研修になれたのも、皆さんのおかげです。高校生という人との出会いが限られた身分で、皆さんとの出会いは大変私にとっては勉強になることが多くありました。UDを学ぶという目的のもとアメリカに旅だちましたが、UDというのはただのデザインではなく、もっと血の通った、他人のことを考える人間的なところからでている物のような気がしました。それが私が研修の中で学んだUDです。そしてこの研修で得た職業、年齢、立場が様々な仲間は、私の心の視野を大きく広げてくれたと思います。これからももっと色々なことを学んで、日本の社会や制度、そして人の心もUDにしていけるようにがんばりたいです。



「やさしさを感じたボストンの建物」

県立あぶくま養護学校高等部 3年 藤島 卓



1 はじめに

私が、「ふくしま型UD実践リーダー養成事業」の研修に応募しようと思ったのは、ある日突然担任の先生に「ユニバーサルデザイン研修でアメリカに行ってみない?」と言われたことがきっかけです。家に帰つてから一人で応募するかしないか迷いましたが、アメリカに行くことは小さい頃からの夢だったので行きたいという気持ちが膨らみました。ユニバーサルデザインのことはほとんど知りませんでしたが、担任の先生から教えてもらってなんなく分かりました。私の父は、大工です。その父の影響で建物に興味を持っていたので、アメリカのユニバーサルデザインの建物はどんなものなのか見てみたいと思いました。「団員に選ばれた。」という知らせを聞いたときは、涙がこぼれそうなほどうれしくて早くユニバーサルデザイン研修に行きたいという気持ちでいっぱいでした。

2 事前研修では

7月と8月の事前研修では、研修の内容が難しくて分からぬことばかりでしたが、ユニバーサルデザインとは障がいのあるなしにかかわらず、誰にでも使いやすいという考え方だということがよく分かりました。また、グループのメンバーは初めて会った人たちなのに、驚くほど自然に話す

ことができ、視察先の班別行動についての話し合いでも盛り上がり、ユニバーサルデザイン研修への期待がさらに膨らみました。

3 印象的な通路や建物

研修先のボストンの街は、日本と違い、どこへ行っても段差がほとんどありませんでした。道路や建物の中は移動しやすくなっていて、障がいのある人や子どもなどに配慮した造りが印象的でした。

研修一日目に訪れた水族館で最初に目に付いたのは、ガラス張りのドアでした。中の様子がよく分かり、開放的で明る



い感じがしました。床は、緩やかなスロープになっていました。さらに、館内の壁はぐっと低く、動物のまわりは壁ではなくガラス張りになっていました。身長の低い方や車いすの方でもまったく無理のない姿勢で見ることができた造りでした。また、魚の名前の表示や説明がライトで色別に案内されていてとても見やすくなっていました。

4 政府に保護された建物

研修三日目は、アダプティブ・エンバイロメントを視察しました。ここでは、人種・皮膚の色・性別・出身国・年齢・信条等に基づく差別を禁じた公民権による保護を、障がい者も健常者と同様に受けられることを知りました。しかも、州政府や地方政府が新築する一切の建物について障がい者がアクセスできるようにすることを義務付けているそうです。建物に変更を加える場合についても同様だということや建物の新築の条件は、公共施設だけでなく商業施設についてもADAにより義務付けされていることがわかりました。

5 生活に浸透しているUD

研修四日目に訪れた公共図書館では、館内の見取り図が色別に分けてあり、カ



ラフルでとても見やすいものでした。手すりには、目の不自由な人のために

点字で案内されていました。

図書館を出るとき、驚いたことがあります。車いすの人がごく自然に車いすのマークを押してスッと出て行きました。ユニバーサルデザインの利用



に大変慣れていて、そこに住む人の生活に当たり前に浸透している光景に出合い、やはりボストンは進んでいるなあと思いました。

6 おわりに

今回、「ユニバーサルデザイン研修」に参加させていただき想像をはるかに超えるような勉強をさせていただきました。この研修で学んだことを忘れずにこれから的生活に活かしていきたいと思います。私は、ユニバーサルデザインの生みの親であるロンメイスさんを大変尊敬しています。福島県においても、障がいのある人や子どもなどに対してやさしい建物や街づくりをすすめていかなければならないと思います。そして、これらを21世紀に残していくような仕事に自分も参加していきたいと思いました。

最後になりましたが、「ユニバーサルデザイン研修」をすすめてくださった担任の先生や家族、研修中にお世話になった団長、引率の先生方や団員の方々、現地で出会った多くの方々に深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

「心が育てるユニバーサルデザイン」

河野 由美子



私がこの研修に参加して最も感動したのは、アメリカの障がい児に対する教育支援である。障がいのある子供に対し、保護者や教員のほかに、多くの専門家が加わり、0歳から一人ひとりの発達に応じた支援計画が作成され、それを十分に活用した教育支援がなされている。

福島県でも、就学前から就学時、そして社会に出てからの支援を円滑にするために、「個別の支援計画」や「個別の移行計画」の作成が進んでいるが、アメリカのように、様々な分野の専門家が参画して個別の計画を作成し、さらにそれを活用していくには、まだまだ多くの整備が必要であると感じている。

特に2歳までの個別家族サービス計画には、障がい児本人への早期教育支援にとどまらず、家族への支援が盛り込まれている。

私には知的障がいと身体障がいを併せ持つ重複障がいの子供がいる。

障害がどのようなものであろうと、親は一番その子に適した教育を受けさせたいと願うものである。精神的にも閉鎖的になりがちな幼少期の子育ての時期に、出生時から障がい児を抱えた家族に対しての心のケアや、3歳からの個別教育計画につなげるための連続的な教育サービスが提供されること、保護者にとっては心強

い支援であると思う。

ボストンでの研修中、私達は視察先でたくさんの障がいのある人達と出会った。ボストン市役所の福祉担当者、スパルディング・リハビリテーション病院の人事担当者、アダプティブ・エンバイロメントのスタッフ。みんな障害ありながら、それぞれが主要なポストで重要な仕事を任されていた。この事実は、障がい児・者に対する学力の向上や自立を目的とした教育支援と、就労に際し障害を理由に差別をしてはならないことを盛り込んだADA法が機能していることを実感するものであった。

アダプティブ・エンバイロメントのスタッフは、電動車いすを自分の足のように使い、広い事務所の中を、障害を感じさせないくらいの速さで移動していた。



機能的な限界は環境によって左右される。障害を補える環境が整えば十分に就労や自立が可能な人達が私たちのまわりにもたくさんいる。

1970年代、アメリカで「障がい者を施設から解放する運動」が起きたとき、障がいのある人達が移り住む地域は、学校や図書館、住宅から公共の場まで、受け入

れる環境は整っていなかった。その解決のためにアダプティブ・エンバイロメントが活動をはじめ、現在に至っている。

障がいのある人が地域の中でいきいきと生活を送るために私たちがすべきことは、彼らを受け入れることの出来る地域社会の実現と、それを行っていく人材の育成であると感じた。

私は今、障がいのある子供たちのために放課後や休日の余暇支援を目的とするNPOの活動に携わっている。市の委託を受けて運営している学童クラブは、市内の養護学校や特殊学級の子供達のほか、学区にある小学校の子供達も利用する、統合教育の学童版である。

子供達の間にバリアーはなく、耳の不自由な友達のために手話を習いたいと子供達から声があがる。ユニバーサルデザインとは本来、こういうことの積み重ねから生まれてくるべきものだと思う。

私は高校生のボランティア養成にも携わっているが、障がいのある子供達とのかかわりの中で、進路を変えるくらいの大きなものをつかんでいく学生もいる。

たとえ重度の障がいがあったり、コミュニケーションがとれなくても、彼らは何の計算もなく私達に大切なことを与える力を持っていると、パトリック・オーハンズ小学校の子供達同士のふれ合いを見て改めて感じた。



私達のまわりには、障がい者や高齢者、子供や妊婦、いろいろな支援を必要とする人達がたくさんいて、疑似体験だけでは理解できない場合が多くある。

それでも私たちに出来るのが何かを考え、歩み寄ろうとする気持ちがあれば、それが「心のユニバーサルデザイン」であると思う。

今回のボストン研修への参加に際しては、子供のこともあり、一大決心で臨んだ経緯がある。一週間という長期の研修が可能になったのは、家族の理解はもとより、家庭と学校と学童クラブの連携が大きな要因だった。

地域の中に支援を必要とする人達の受け皿があるということは、出来ないと思っていたことを可能にするということを、今回身をもって体験することができた。

今後も障がいのある子供達への理解者を育てる活動を通して、地域にユニバーサルデザインの必要性を発信していきたいと思う。



「ソーシャル・インクルージョン」

佐藤 玲子



私は、住宅を中心に建築設計をなりわいにしています。ときどき、まちづくりにも首を突っ込んだりしています。私は悩んでいました。

住宅の玄関を開けるなり飛び込んでくる、縦横無尽に取り付けられた、これ見よがしの手摺……コレって美しい？ 人にやさしいまちづくり条例のコンプライアンスに明け暮れてない？ デザインってやっぱり美しくなくちゃ。誰もが使いやすく、痺いところに手が届いた瞬間「そう、そこそこ！」といったようなフィット感で、さりげなく、しかも美しく、そんなしつらえを考えたい、と。

単体・点としての建築で悩んでいました。そしてまた、線・面といったまちづくりでも迷っていました。

古い建物や資産を活かしながら、先人の知恵(雨仕舞)として残された段差や、「ちゃんこちゃんこ坂」などの名の残る、飯坂の風情をたいせつにしながら、ユニバーサルなまちづくり、って何だろう？と。

そんなことの突破口を求めての応募でした。

さあ今「それらに答えが出せたか？」と問われると、正直、まだ自信が持てずにいます。

初日、アメリカ発祥の地と言われるボストンの、当時のままの、赤レンガの町並・今にも馬車音が聞こえてきそうな石畳・ガス灯の残るビーコンヒルに立って思ったこと……。

「何、この坂？」ちょっと歩き回るには急な坂、坂、坂。通訳の松川原さんについて聞いてしました。「ボストンの体の不自由な方から、『この坂は急で歩きにくい』って声はあがらないのですか？」に対する答えは、「ボストンの障がい者の人たちは、歴史あるまちに手を加え、変えてまで、自分たちが歩きやすくなることは望んでいないと思いますよ。」

歩道で見かけた、点字ブロックと見まちがえたレンガの凹凸と、道路さえも斜めに横断する赤いライン：フリーダムトレイルに沿って歩くと、16ヶ所の独立戦争の史



跡を巡ることができるようになっていました。

アメリカ合衆国としての歴史の浅いこの国では、1990年に施行されたADA法のコンプライアンスと、歴史や史跡を天秤にかけたとき、「今を生きる者は、次の時代へこれらを伝えるバトンランナーである」と思っているのだと知りました。一度破壊したら二度と再生できない！その罪深さを知っているのだ、と思いました。トマス・クレーン・パブリック図書館もしかりでした。アメリカ最古のステンドグラスが美しい古い建物のほうは手を加えず、そこでは階段の手前に人員を配置することで、体の不自由な方が階段の先にある本を必要としたときに、応えられるようになっていました。

この夏、応援団をしているふくしま城下まちづくり協議会界隈の蔵が、また2つ、土と化したのを、唇を噛んで見ていましたばかりでした。

歩きながら、車椅子マークのさりげなさに気づきました。ボストンでは、そばまで行かないとわからないぐらい小さい表示なのです。

ユニバーサルデザインの日本での先進地熊本では、わかりや

すぐ大きいピクトグラムに目を引かれ、シャッターを切っていました。



やっと思い当たりました、ADA法の存在に。ボストン、いえここアメリカでは、車椅子で出かけても、必ずアクセスできることが保証されているのだ、と。段差がないのは当たり前なのでした。この安心感は何ものにも代えがたいものだ、と思いました。ピクトグラムが大きい必要がない、それはまちの美しさを損ねない、ということでもありました。

歴史への敬意と、たぶんボストンの人々のDNAにある、美しいものへのこだわりが、このまちの景観を魅力的にしているのだ、と思いました。

そして、ADA法の先にあるものなのでしょうか。この視察で私が一番心動かされたのは、パトリック・オーハンズ小学校で見た、私たちも一緒に食べましたが、知的障がいの子とそうでない子が一緒に給食を食べていたときの光景です。おなかがすいて先に食べ終わってしまった子が、もっと食べたくて食欲のままに、まだ食べ終わっていない子の分に手を出してしまいました。なぜ食べ終わるのに時間差が生じてしまったのか？それは、その子が食べやすいように助けてあげていたからです。助け合うべきことは助け合い、人間として互いを尊重すべきことは尊重し、きちんと主張す



個人別レポート

べきことは主張する、それは相手に知的障がいがあるっても、一旦は言う「これは私のよ。あなたのは食べ終わったから、もうないのよ。」と。知的障がいを特別視しない。真剣に言う。そしてただならぬ勢いに、その子はたじろぎ、一瞬手を引っ込め理解したかに見えた。子どもの頃から、まっさらな心で、自分とは違う人間の存在を知る。そして理解する。この何気なく刷り込まれていく、相手を尊重する思いこそが、ユニバーサルデザインの原点ではないか、とつくづく思ったのです。

奇しくも連日同行して下さった、アダプティブエンバイロメンツの特別研究員の、井上滋樹さんの口からたびたび発せられたことば「インクルーシブ」「ソーシャル・インクルージョン」(:みんな一緒)という発想から、すべてがはじまっていると思いました。

アダプティブ・エンバイロメンツでは、ハーバー・アイランドを電動車椅子で疾走してみせたクリスさん、をはじめ多くのスタッフが、ボストン市役所ではスピネットさん、スバルディング・リハビリテーション病院ではオズワルドさんが、小学校ではビル校長先生が。体の不自由な方が、社会の中心で声を出し、参加して、まちやものを創っていました。それはADA法施行以降、訴訟社会のアメリカだからこそ急進できたのかもしれませんし、社会が人々が、そうなるよう努力してきたからでもあったと思います。また、古い

ものをだいじにすることや、デザイン的な美しさを尊重することで生じたバリアは、極々自然体で身につけた、相手を思いやることや声をかけ合うことで、乗り越えているように見えました。ADA法はあるけれど、そのコンプライアンスよりも、心のユニバーサルデザイン(教育)が、ソーシャル・インクルージョンのプロセスこそが、私の分野であるハード(物理的な)面のユニバーサルデザインの具現化を、突き動かしているように見えました。

ボストンで出会った人々から、年齢を越え障がいを越えもう一つの私の家族となったメンバーから、ひとりよがりに勝手に閉塞感に陥っていた私は、たくさんのサジェクションをいただきました。視界が広がったように思います。試行錯誤しながら、でもここから少しずつ、さあ羽ばたかなければ、今そう強く思っています。
カム・トゥギヤーザー！

最後になりましたが、この研修で支えていただきましたすべての皆さんに、心より感謝申し上げます。

ほんとうにありがとうございました。



「出会いの素晴らしさ」

曾我 啓子



本年度も「ふくしま型ユニバーサルデザイン研修」を施行してくださり感謝致しております。

30年近くジャンルの違う4つの商売に携わって来ましたが、3年前に身障の手帳をいただくようになり、現在はNPOストロークセンターに所属しております。そこで、常に自立して利益を上げるためには何をしたらいいのか、技術のない私は自問自答の毎日でした。そこで<ユニバーサルデザイン研修>の募集をしているのを見た瞬間「これはチャンス！」と思いました。幸いにも団員資格を得ることができ今後の私の人生に大きな収穫をいただけた研修になりました。

現在盛んに自立支援法のことを耳にします。私もいろいろな障がい者の方と関わっておりますが、一生懸命頑張っている方もいらっしゃいます。しかし商売として成り立つところまではかなり厳しいものがあります。最初は、義理、または、同情のような感覚で障がい者の作った製品として買ってくださるかもしれません、商売としては、ほんとにお客様が欲しいものを作ることができなければ、なりたたないと思います。作品をつくるだけでなく、身体をつかっての仕事など、障害の内容と程度により仕事は出来る

が日本ではまだまだ受け入れられないのが現状です。

一般的にユニバーサルデザインというと、階段部分がスロープとか、建築物・道路標識とか頭に浮かびますが、私のユニバーサルデザインは障がい者の出来ないことを健常者がフォローして共に楽しく仕事をして幸せになるために努力する。人間は幸せになるために生まれてきたのだと思うし、たまたま身体に大なり小なりの障害があるだけで健常者と同じであるし、誰でも年を重ねることにより様々な障害ができるものです。

しかし、いろいろ話には聞いておりましたが、研修に参加させてもらいつくづくアメリカとの大きな違いを感じました。それは、研修二日目にボストン市役所を見学した時に、福祉課に十年間在籍のスピネット氏にお会いできた事でした。ミーティング中にも市長から直の仕事の電話がかかってきてとてもお忙しい方ですが、四十年前の事故により現在は右膝から金具がはいり、歩くのに不自由な生活をしてらっしゃるにもかかわらず、とてもパワフルに楽しくお仕事をされてらっしゃるお姿を現場で拝見させていただき感激致しました。明るく包容力があり素晴らしいオーラが出てらしたスピネット氏を一目で大好きになりました。

個人別レポート

アメリカ社会では「米国障害者法」というものが制定されており、雇用面でも人種、出身国、皮膚の色等の差別禁止と同じように、障がい者雇用が健常者と同等に扱われます。もちろん障害に応じた設備対策をして同等の位置において、採用者側の仕事にあった者が雇用されます。障がい者だから「やってもらうのは当たり前」じゃなく「自分の可能な限り挑戦する」という姿勢が本人の顔つきから容姿、体全体から自信が伝わってくるのでしょうか。わたくしは、自分自身に欲しかった素適な自信と明るさと優しさを、全て、大きくもってらしたスピネット氏にとても親しみを覚えました。私の手渡したちょっとした名刺の工夫がとても気に入ってくれたこともとてもうれしかったです。

この研修に参加できたお蔭で自立するための勉強や、アメリカンパワーを肌で感じてきました。

側近のアニータさんも歓迎してくれました。彼女は二ヶ月前まで車椅子生活をしていて現在は職場復帰してきた方です。最近、障がい者のお友達がエイズで亡くなりとても悲しい毎日でしたが、

日本から障がい者と健常者が一緒にボストンに研修に来てくれて今日はとても幸せだと話してくれました。お別れぎわにスピネット氏からの「貴女は頑張り抜く力がある。応援していますよ」との言葉に感激して、私のこれから的人生に大きな力となりました。

最後に教育の都市ボストンでもとてもレベルが高く、入るのにも厳しいという学校を視察してきました。

パトリック・オーハンズ小学校はとても素晴らしい教育をしていました。これぞ[ユニバーサルデザインの原点]だと思いました。障がいのある生徒たちのそれぞれのニーズに合った教育を的確に把握していると思いました。健常な生徒と分け隔て無く、また、生徒たちも何の違和感も無く勉強している姿を見たときに何年か後の福島もこの



ようになればと思いました。キラキラと目を輝かしながら私のところに寄って来る生徒たちとスキンシップしながら、数十年前の学生時代のなつかしい教育実習を思い出し、楽しいひと時を過ごした時に私の中で沸々と湧き上がるのを覚え何かふっ切れた気持ちになりました。障害があっても、人間として尊厳を持って生活できる社会でなければならないし、自立して一般就労で関わりを持ちながら離職しないよう、障がい者の視点で必要な支援をもらえるようになることが大事だと思う。今、私に出来ることは、手に職をつけ、障がいの方々と一緒に勉強しながら、健常者は「障がい者だから」と変に気をつかわず、障がい者も「やってもらって当たり前」というおごりを

持たないで関わっていけたらと思いまし
た。プラス思考の私は、「これぞアメリカ
ンウェイだ」と感じるパワーある人達に
お話を聞いて、障がいを持った生徒と健
常者の生徒が、強者が弱者を守るとい
う戦前の日本の思いやりの精神を育て
る小学校を研修できてとても感謝してお
ります。日本では、障がいを持った児童
や車椅子生活の方、杖を必要とする方、
また、介助無しでは外出できない方々
が、あちらこちらバリアフリーになったと
はいえ、一歩も踏みだせないです。少
しでも外出する機会をもうけて、いろ
いろな人達と関われる楽しみが持てま
すようお手伝いしてゆきたいと思ってお

ります。

私がボストンに行って素敵な方々との
出会いによって、大きなエネルギーを
いただいたように、人は多くの人に出会
うことによって成長できる事を実感しま
したので、尊敬するスピネット氏に、少し
でも近づけるような人に成れますように。
そして、いつの日か再びボストンに行っ
て、素適な報告ができますように。
日々大きな夢をもってまい進していきま
す。

最後に今回の企画に関わって細部に
わたりお世話くださった方々に、心より
感謝申しあげます。



「ふくしま型UD海外派遣研修に参加して」

村松 祯



1. はじめに

私は福島県中途失聴・難聴者協会の代表をしており、私自身聴力障がい者である。この研修視察については、以前より案内要綱で承知していたが仕事の都合上、参加を断念していた。今回、時間が取れることになり参加を決意した。

特に1990年に施行されたADA法に関心があったので、どのように実施されているのか実際に確かめてみたいと思っていた。

ADA法とは人種、皮膚の色、性別、出身国、年齢、信条に基づく差別を禁じた公民権による保護を障がい者も同様に受けられ、公共施設、雇用、交通、各州政府と地方政府によるサービス、通信について障がい者に均等な機会が保障される、という法律である。

聴力障がい者は耳が不自由なため多くの情報が得られない。最近、日本でもテレビに字幕が表示されるようになったが、まだまだ不十分であり、公共施設には情報保障の設備がなく社会参加しようにも出来ない状況にある。雇用面においても理解が乏しい現実がある。

バリアフリーというと障がい者を対象とするが、高齢化社会であり加齢とともに

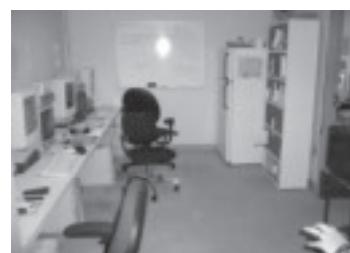
耳が不自由であったり、目が見えにくくなったり不自由が重なる。これらの状況を踏まえるとこれからの社会において安心・安全に暮らすためにユニバーサルデザインの考え方方が基本になってくると考える。

2. 放送局・ホテル

それぞれ視察した中で耳や目の不自由な人のために尽力している「ボストン公共放送WGBH」は字幕放送や感覚障がい者のための便宜に力を入れていた。詳細については各施設の報告の中で述べられている。



各パートのスタッフの方々が懸命に研究し、サービスを提供している姿に感動した。日本ではIT・放送メディアや行政に携わる人たちの支援や協力なしではこの面でのUD実現は難しいのではないかと感じた。



ホテルについても関心があった。アメ

リカのホテルでの「ユニバーサルデザイン」は1997年に正式な規格として確立された。97年以降の建築のホテルには以下のような設備がある。

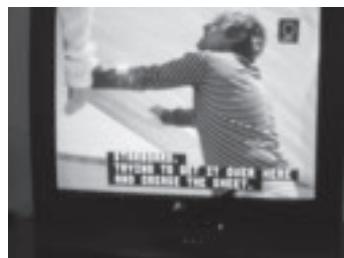
○聴覚障がい者用の電話機能

○字幕付きテレビ

○拡声機能受話器付き電話

○電話発信時シグナル

○聴覚障がい者のための緊急時ドアノックなどであるが、今回宿泊したホテルはそれ以前に建築されたため設備がなく確認できなかったのが残念であった。備え付けられていたのは字幕付きテレビと火災のときに点滅する火災報知点滅機が廊下のドアの上部にあつただけであった。



3. 小学校

障がい児が健常児と区別なく共に学ぶ機会を作っているパトリック・オーハンズ小学校を見学した。健常児と障がい児が一緒に学んでいた。全校生33%が障がい児であるということで驚いた。日本では考えられないことであり、さすがアメリカの風土で可能なのかと思われた。授業参観したがどの生徒が健常児で障がい児なのか区別がつかなかった。もちろん教師は一人ではなく2・3人でT・T (Team・Teaching)指導していた。特殊教育専門の教師がつ

いている。

日本のように健常の生徒だけのクラス編成であるとその中で優劣の序列が生まれやすいじめの問題が出てくるのではないだろうか。幼少期から障がい児や体の弱い子どもたちと一緒に過ごすことによ



りいろいろな人がいるということを体で実感でき、思いやりやボランティア精神などが育まれて行くのではないかと思われた。健常の子どもを通わせている、案内してくれた日本人の保護者がそう語っていたのが強く印象に残った。

4. 日本は

日本でよく質問されるのは「障がい者がどこにいるのかわからない」ということである。とかく日本の場合は健常者と身障者が隔離される傾向にある。聴力障がいのように外見上わからない障がいもある。であるからどこに「身障者がいるの」ということになってしまう。身障者が一般社会に出て行けば好奇の目にさらされる。

日本の風潮では集団と同じでなければ異質者になってしまう。異質者は排斥されるというのが日本の風土である。小学校視察ではUD精神を育む示唆を与えてくれた。

このたびの海外研修メンバーは健常の高校生、身障者の高校生、健常の成人、身障者の成人、福祉関係、建築関係、教師、行政側と多岐にわたり構成され、これだけでUDを実践できるミ

個人別レポート

二世界であった。私は聴力障がい者であるがそれがどういう障がいであるのか、特徴など理解してもらいたい側面もあった。他の障がいについても理解を深め得るのに十分意義ある研修であった。

5 これから

今回、アメリカのボストンを視察したが、アメリカは多民族国家でそのルツボである。肌の色や頭髪の違いなど生活の場面で体感できる。いろいろな相違があって当たり前というお国柄である。宗教はキリスト教が多い。どちらかというと“集団”より“個”を尊重するお国柄である。それぞれの違いがあって当たり前という国ではユバーサルデザインは浸透、普及しやすい。

日本の場合はヨーロッパのように国境を接しているわけでもなく、島国でそのため他国との交流も少なく長い鎖国時代があった。同一、単一民族で髪の毛は皆黒く、宗教は仏教である。そのため“個”より“集団”に重きを置く行動パターンの風土である。皆と同じ、周りと同じでないと異質の存在とみなされる。無意識のうちに皆と同じ行動とる。

このような風土の中では、例えば金髪の人はジロジロ見られたり、身障者は物珍しそうに見られたりする。“個”はあまり尊重されない。むしろ異端者になりがちである。異端者は排除される。

そのような風土の中でUDを浸透させることは容易ではない。しかし、やらなければならない。そうでなければ“思いやり”、“優しさ”、“安心”、“安全な”社会が実現しない。

少子高齢化の社会となり社会生活環境のソフト面、ハード面を変えて行かなければならない。現在は健康な人でも、いずれは老い体が不自由になってくる。“今日は人の身、明日はわが身”になるわけである。将来の自分のためにも、そして他人のためにも意識改革をしておかなくてはならない。

UD精神、浸透は待ったなしである。急がなくてはならない。根気よく、一步一歩と、ちりも積もれば山となるごとく、UDの考え方を啓発していかなければならない。UDに関心がもたれ、浸透し、県民ひいては国民生活の基本となるような社会の実現に向けて努力していきたい。



「『ほんの少しの配慮』に触れて」

渡邊 大輔



Q: UDを知ったのはいつです？

UDって言葉を初めて見聞きしたのは大学3年の秋、東京ビッグサイトでやつてた「国際福祉機器展」を見た時だね。どの企業のブースだったか覚えてないけど、「全ての人にとって使いやすい。」って触れ込みに、「この何処が使いやすいんだ。偽善のような態度で障がい者に物を売るな。」と、かなり批判的に思ったなあ(笑)。どちらにせよ UD を表面的にしか理解していなかったと思う。

もともと、オイラが小学校 3 年の時に母親が呼吸器の難病を患っていたから、障がいを持った人について偏見や差別ってのは全く無かったけど、4 年前に仕事で 2 級ヘルパーの資格を取った時点で、障がいの種類や、UD の重要性をしっかりと理解することが出来たと思う。

Q: 何で国際福祉機器展に？

こん時は、肺が悪い母親の在宅生活を、少しでも楽なものに出来ればなあ、って言うオヤジの配慮もあって。でも、実際にやって見たら、あれもこれも全て新鮮で、母親のこと全然頭から吹っ飛んでた(笑)。

でも、障がいを持った人たちが会場を行き来し、各ブースの接客担当と話をし、生き生きとしている姿には感動した。自分の母親を含む障がいを持った人たち

が、自信を持って街を歩ける様にできたらなあって、切に願った。

Q: それでアメリカ研修に行ったの？

そうだね。まだ中学校のとき、体が不自由な母親が授業参観に来た時に、階段を登るのを介助していたら、同級生からマザコンとか言われて。「こんちくしょう！」って思った時から、障がいを持っても、誰からも冷ややかな目で見られることがない社会を作りたいって、思ってたからね。お前は政治家かってね？(笑)

それに、高校を出て大学・仕事で、約 8 年都会暮らしをして、いわきに戻ってきたんだけど、高校時代と比較して、「高齢化がすすんだなあ。」って感じたのさ。確かに都会は若者が多く住んでるけど、それにしても何でこんなに「年老いた街」に感じるんだろうって考えた。

良く観察していると、階段を登ったり、横断歩道を渡るのに苦労する高齢者の姿が凄く目に付いてさあ。高齢者が街に出てくる準備が不足しているって感じたのさ。公共交通機関だったり、道路・建物だったり、そういうものが都会と比較すると、凄く貧弱に見えたのさ。あとは、心の部分。例えばスーパーの身障者マークの付いた駐車場なんか、元気なオバちゃんが気にも留めず堂々と駐車したり、車高を落とした高級車が停まって

個人別レポート

いたりで、あまりに配慮が足りない状況に腹が立つ事が多くなってきたから、じゃあ ADA 法で制限されているアメリカってどうなのさって思って、行って見たいと思ったのさ。

Q: 今回印象に残ったことは?

まずは水族館、そこまで緩やかなスロープでフロアを繋いでくれれば、例えばウチの母親みたいに階段を登ると息切れがするという人でも、



ゆっくりと歩いて見て来れるし、脳梗塞の後遺症なんかで、足を引き摺って歩く人なんかでも、危険は少ないよ。実を言うと、1箇所だけスロープやエレベーターで行けない部分があったんだけど、それ以外のところで、あれだけ配慮してもらっていれば、文句は出ないんじゃないかな。

次に、放送局「WGBH」クローズドキャッシュの普及は、とっても重要だと思うし、なかなか浸透・普及しない事から、それを法律として定めたということが素晴らしいと思う。あとは、災害や緊急事態の時に視聴覚に障がいをもつ



ている人たちへ、どうやって情報を素早く正確に伝達するかの研究をしているって話をしてたけど、日本でも真剣に考えて行くべきだと思った。

街 자체が文化財に指定されていて建物の大規模改修が出来ない「ビーコンヒル地区」なんかを見ると、段差だらけだし、地域一帯が「障がい者への配慮はしていません」と言いつ切れる状態。この地域では ADA 法よりも文化財の保護が優先されるって事だったけど、それも当たり前の事なんだよ。だって例えば、法隆寺を UD 対応に大規模改修しようとはならないでしょ。だけど、街の一区画が指定されているというと、スケールの大きさが凄く新鮮に感じたよ。



あとはねえ、今回ボストン市内の地下鉄にも乗ることができたんだけど、車イスを使っている団員の江連ちゃんなんかも、とても使いやすかったって言ってたし。ってのは、日本の鉄道の駅だと、階段はあってもリフトが無いって駅もかなりの数あるでしょう?。日本の鉄道会社も段々にエレベーターを設置してきてはいるようだけど、まだまだ全駅とまでは行かないのが現実。だけど、ボストンの駅は当たり前に付いてるし。しかも、日本の地下鉄で車イス利用者が利用するときは、駅の係員に話をして準備をしてもらわなきゃならないでしょ?



今回、江連ちゃんは、エレベーターで

降りて來たと思ったら、そのまま電車に乗っちゃったよ(笑)。

話しがアッチコッチに飛んじゃったけど、どちらにせよ、今回の視察ではボストンでは障がい者への配慮が当たり前にされていた。

また、UDって何なんだろうって疑問は、随分と理解することが出来たんじゃないかな。あとは、障がい者の社会参画が進むだけの、常識と優しさがある国だと言うことも分かった。

Q:具体的に言うと?

UDについて、「全ての人が使える」って公平性の原則も、アダプティブのフレッチャー所長のレクチャーの中で、「身体機能に制限がある人たちに焦点を当ててデザインすることで、身体機能に制限の無い人たちにも使うことのできるデザイン」と分かりやすく定義してくれたりで、今までこれってUDなのかな?と思っていた製品がUDに見えるようになって來た(笑)。でも、まだまだイカサマUDの製品が多いのも確かだけど(笑)。

あとは、例えば、障がい者が働いている姿を見る機会がとても多かった。帰国してから周囲を見渡すと、いわき市では果たして…? (^;Aとなっちゃうもんなあ。もちろん自分の会社も含めてね。

一言ではなかなか言い表せないし、誤解を生む発言だけど、障がい者の個々の権利と尊厳を真に認めている国だと思った。そして障がい者を受け入れて、自分達の仲間として、暖かく接する国民性だとも思った。

Q:UDの普及の為には何をします?

アメリカから帰ってきて、改めて現状を見ると、障がいというものに対する理

解不足からくる誤解や、障がい者に対する偏見や差別も少なからず存在している。また、若手の街づくりを目指す人たちの集まりですら、UDについて問い合わせても、あまり反応がないのが現実。

自分達はまだ障がいをもっていない、または若いので不安がない。だからUDについて真剣に取り組むことが出来ないのではないかと思う。

これからUDの社会を具現化していくためには、生活する人、一人ひとりに自分や家族が障がいを持ってしまったら?、明日はわが身なのでは?と問い合わせていくしかないと思う。

そして、障がいという事を正しく理解した上で、実際に障がいをもつ人たちに対して、ほんの少しの配慮を持って温かく接することが、UDの実現に繋がっていくことだと思った。

今回の視察では、本当に素晴らしい経験をさせてもらったと思ってる。オイラはこれから、イチ社会人として、まちづくり団体に参画する者として、今回の経験と気づきを人に伝えていくことに汗をかいていきたいと思ったよ。

最後にひとこと

今回の視察では、障がいと向き合って生きていく人たちの姿に、本当に涙がこぼれたり、一緒に行った高校生達から、かなりの勇気をもらったり、人間として少しだけ大人になれた素晴らしい旅でした。

県の方々、アダプティブのスタッフの方々、そして一緒に行ってくれた団員の皆さんに、心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

車イス・マーク



川崎議事堂



ハーバード大学



ビーチストリート

いたるところに車イスマークは表示されている。
マークは、車イスに乗っていても目の前に
表示されているところが多くなかった。
ADA法が活かされている。



ボストンのまちなみ



いやあ、この信号見た目は分かりやすかったんだけど、歩行者信号が赤になるのメッチャ早かったわあ。



ほとんどの道路に名前がついてるし、標識は日本より分かりやすかったと思う。



多国籍トイレ・・・(謎)
まあ、親切だよね。
オイラここのドアに挟まれたから・・・(^^;A



車の進入防止柵。
日本では、これだけデカくても盗まれるな (^^;A



自転車は整然と停められてたなあ。盗難チャリや放置チャリなんか無いのかね (^^;A

ボストン・フォトギャラリー



歩道から車道の「すりつけ」は、段差が少なくてスゴク楽だったyo。
新しいレンガの歩道は車椅子でもスイスイだけど、文化財の石畳は痛そう(>).<)

早起きして探した電柱。
日本では当たり前でも、ボストンでは地中化が当たり前。
街灯も、歴史を感じさせるガス灯。レンガのまちなみマッチしてたな。



アメ車特集！



ライトの形や車名のフレートがかっこいい
い！！！



バックライトが大きく、車名のフレートがかっこ
い！！！



大きくて圧倒的な存在感！！
ボディ全体がかっこいい！！



純正のホイールが GOOD !!
ウインカーの大きさも GOOD !!

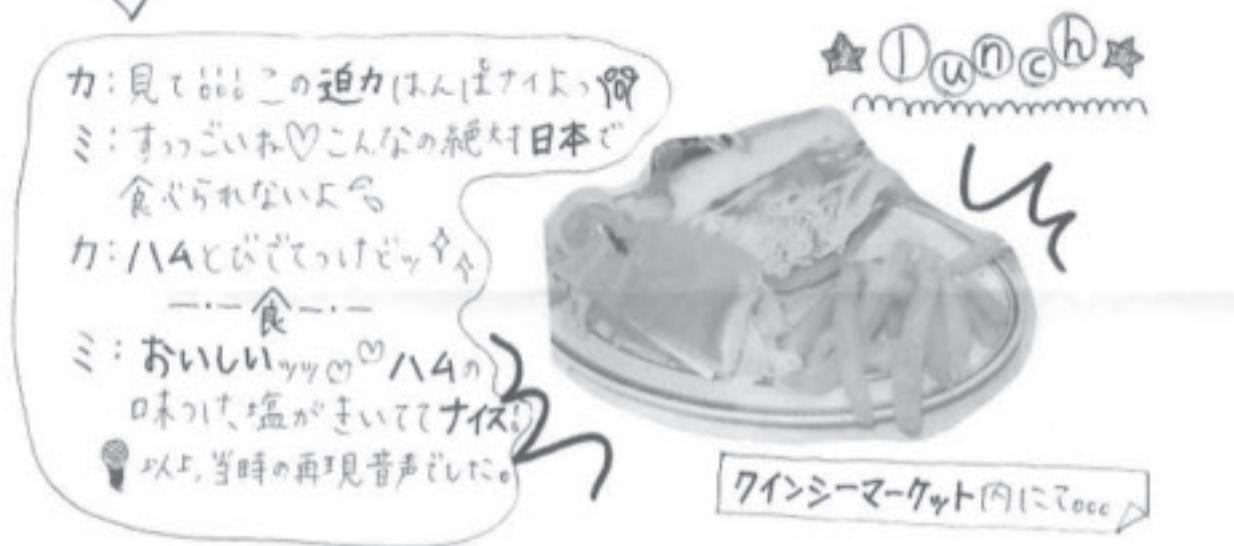


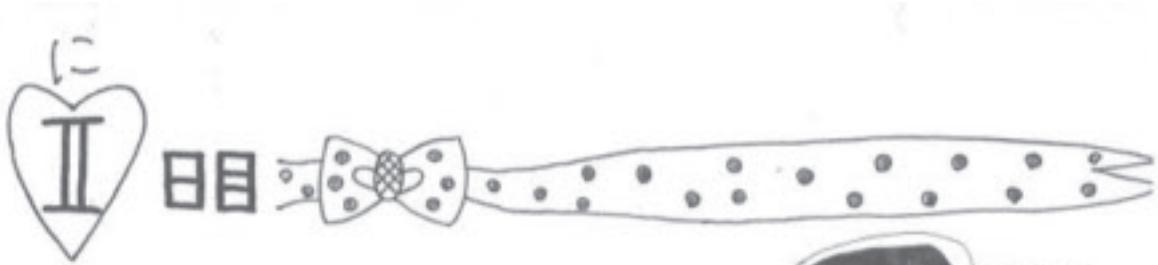
ライトの形が個性的！！
車の形も早そうでかっこいい！！



本場の左ハンドルは本当にかっこいい！！
やっぱりBMだね！！

ボストン・フォトギャラリー





ψ らんちたーる ψ

海がきれいだからタダ
いいだからタダ

この日は、クリスさん・井上さん
とともに船の上でごはん。



カオリンは
“パイシュー”
をorder。



きれいな海を
見る。うれしい
気持ち



ψ おやつψ

イタリア街の店に入って優雅
なひととき



アイスカフェとチョコレートケーキ

ちよと甘めだからおいしいも満足!



ψ でいなーψ

またまたイタリア街でのディナー。高級感あふれる料理でした。

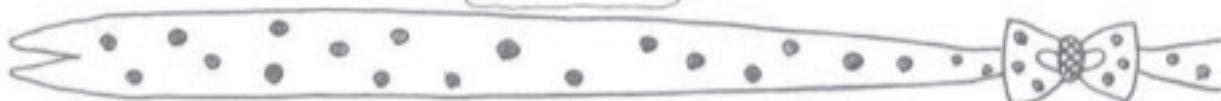


料理運びてきてください

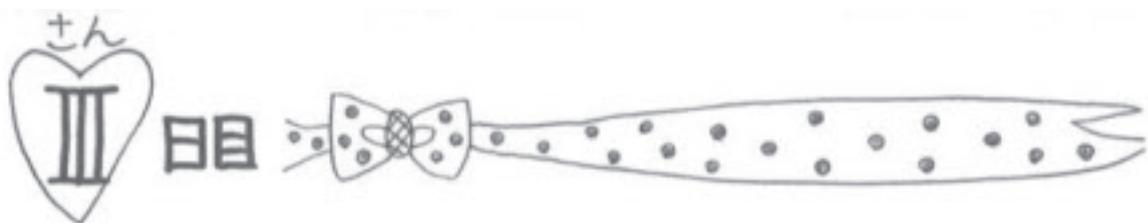
お兄さん、書類
でした。(Y)



ロースターの料理



ボストン・フォトギャラリー



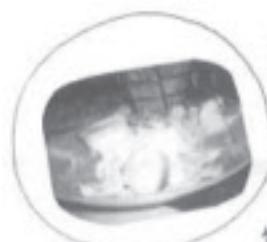
月曜日

この日は、午前中アダプティブ・エンパワーメントを吉祥寺で、お屋もとの会社の中へいだきました。

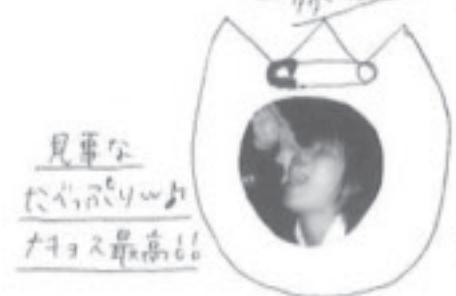


◆サンドイッチ。
中心はトマト、チーズ、
野菜が入っています。

ボリュームあり生くれ
ですから美味しい。



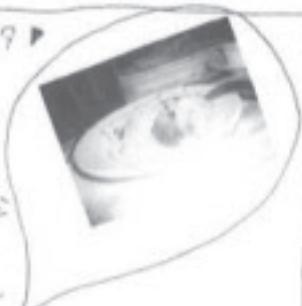
◆サンド
サラダの量を見て
アドバイスありがとうございます
おしゃれで美味しい
アレンジで美味しい
シーフードパスタ♪



見事な
アドバイスありがとうございます
アレンジで美味しい

火曜日

クインシーマーケット内のレストランでお食事



★火曜日
団員の中で1人だけデザートを頼んだ人がいます。
誰でしょう?
①私たちの顧客は団長、河野さん
②機械類はまかせらるべ
③算が高校生満喫中、おつかれ

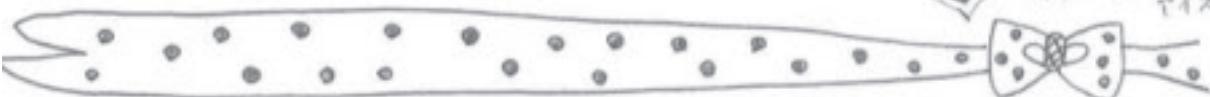


アドバイス
量、はんてなくなります
食べきりませんでいいよ

生クリーミー
アイスとアーモンド
シナモンキャラモニ
やめや



◆アーモンドアイス



4日目



おひるごはん

ハーバード大学
ビジネススクール學食にて★

久しぶりに見る
お寿司にみんな大興奮でびくびく

アソカださじタイ料理へ♪♪♪

よるごはん

タイ料理♪



みんなに
大好評でした♥

ついでに
本当に
おいしかったネ



おまけタヨロ

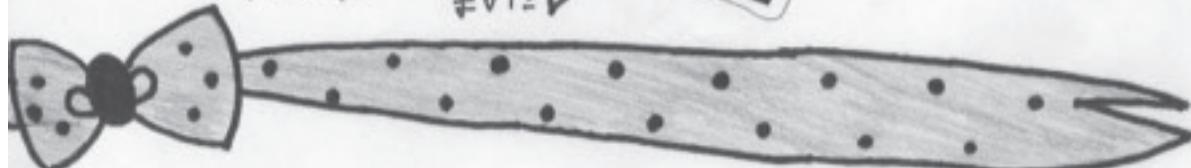


女性陣はレンレンで
アイスを食べにイチャッチャ
キタニ

メンバー通称「バズロビ」

日本で言う、31(サーティーワン)のこと。
そもそも、アメリカじゃあ、バスキン・ロビンス
じゃないと通じないんだよ!!

さあ~みなさん
ター来者に…
バズロビ~!!





THANK YOU SO MUCH!

私達が研修中にお世話をなった方々を紹介したいと思います。
この研修が充実したものになったのも、様々な方のサポートのおかげです。
本当にありがとうございました♪



サクライさん



マツカラさん



ナガシマさん



マキさん

添乗員さん & 通訳さん

サクライさんや添乗員さんとして、始めから船まで一緒に行動していただきました。もはや団員のメンバーのようになじんでいました。ロードはフレキシブルで、私もうつりました。よく中国人に間違えられて面白い方です。本当にお世話になりました。フレキシブルでハーピング③の私達の旅を計画 & 調整してくださいり感謝☆



スズキさん



ワーナーさん

ボストン市役所の方々

選舉がお多忙な時期にも関わらず、私達に詳細な説明をしてくださいました。さらに、私達のために船まで用意して、スペクタクルアイランドの規定も企画してくださいましたととても心の温かい方々です。どの優しさに感謝☆



アダプティブ・エンパイヤメント



フレッチャーさん



クリスさん



バーバラさん



メリーランさん



イワオさん

アダプティブ・エンパイヤメントの方々

アダプティブの方々には、私達の研修をプロデュースしていただきました。訪問先は全て私達が選んだ所ばかりで、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。アダプティブ・エンパイヤメントの新しいオフィスでの会話も、とても勉強になりました。皆さん本当に積極的にUD促進に取組んでいらっしゃって、その姿に私達はとても感激を受けました。お忙しい中、私達に会っていただき感謝☆

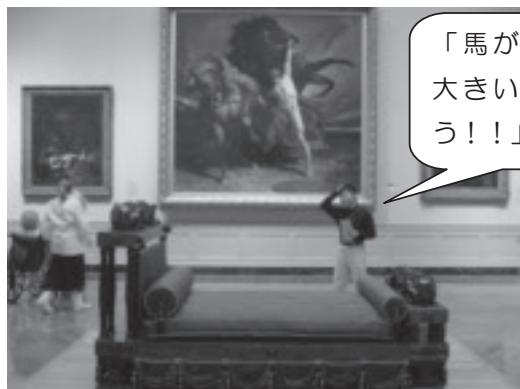
もちろん、他にもたくさんの方にお世話になりました。一人一人に感謝☆

きれいだった ボストン美術館

ボストン美術館で見つけたお気に入りの作品を紹介します。



「シャンデリアがきれい。」
広い部屋にはたくさんの絵画が
展示してありました。



「馬がすごく
大きい！強そ
う！！」



「ライオン大きいな。」



「きれいだった。」
エジプトのコーナーで見つ
けました。



花がきれい。有名なモネの絵も
ありました。

優しさあふれるボストンの街

◇トーマス・クレーン公共図書館



古くて趣のある図書館



車いすの人でもボタンを押せば開く
ドア。これなら簡単に中に入れます。



館内見取り図。
色別になっていて、手すりの内側には
展示による表示もありました。

◇スポルディング・リハビリテーション病院



力のない人でも使いやすそうな道
具がたくさんありました。



ゴルフの手袋。クラブを握れない
人でも、マジックテープで固定す
ればゴルフが楽しめます。

総括責任者・引率・事務局より



人権男女共生グループ 主幹 佐賀 勝

UDの先進地を訪問し、UDがどのように浸透しているか実際に肌で感じる機会を得、特に、「アダプティブ・エンバイロメンツ」でUDの最先端の活動に触ることができたことは、大変貴重な経験となりました。「障がいや年齢など機能的な限界は環境で変えられる。UDは機能的限界を最小にする力がある」とはバレリー・フレッチャー所長の言葉でしたが、実際に数々の訪問先で障がいを感じさせない仕事をしている多くの方々にお会いし、障がいがあつても働く環境が整っていることに日本との違いを感じさせられました。

さて、今回の訪問団ですが、一種、大家族のような雰囲気で研修ができ、結束も強いものがあります。「メーリングリストのつながりが途切れないとつきあいを」と河野団長がいったように、団員同士はもちろん福島県のUDともずっとつながっていていただくことを期待します。



県立平養護学校 教諭 大友 陽子

「百聞は一見にしかず」の言葉通り、現地に行って体感した全てのことが大変貴重な財産となりました。さすがは同じ志を持った団員同士、2回目の事前研修ではすっかり打ち解けて、各人のキャラクターを尊重し合いながら研修されていた姿が印象的でした。アメリカでは多少のトラブルにも慌てず騒がず、逆に何かある度に団員の絆が深まっていったように感じます。引率としては力不足でしたが、このふくしま型 UD 実践リーダー養成事業を通して、団員の皆さんに出会いパワーをいただいたこと、また帰国してからも強い絆の輪の中に自分がいられることが、幸せだと感じています。「ありがとうございました。」お世話になった全ての方に感謝申し上げます。



特別支援教育グループ 指導主事 上妻 弘

本研修を一言で表すと「あり得ない研修」という言葉が当てはまるようになります。それは通常の研修では考えられないような貴重な体験をさせていただいたからに他なりません。関係者以外は入室できない施設の内部まで見学させていただいたり、責任者から直接説明を聴いたり、一般人は立入禁止の日であるにもかかわらず行政の責任者が先頭に立って案内をしていただいたり…。毎朝、目を輝かせて集合される団員の表情がすべてを物語っていました。これもひとえにすべての企画を担当していただいた「アダプティブ・エンバイロメンツ」の皆様との2年越しの継続した研修がもたらした結果であると確信しています。改めて感謝申し上げます。

また団員一人一人が、見聞きし、体験し、実感する主体的な学びが、後の成果発表フォーラムに結集され、大きな成果となって現れたのではないかと思います。微力な私はただ団員の皆さんのお活動を見守ることしかできなかったのですが、団員の皆さんがそれぞれの立場で生き生きと実践する姿を見せていただけたことに感謝します。UD を深く理解することで人生が変わるきっかけとなる、そんな素晴らしい研修であったように思われます。今後の団員の皆さんの御活躍を期待しております。



人権男女共生グループ 主査 鈴木 裕幸

視察先では「目から鱗」の体験をさせていただきました。UDを推進していくうえで、「ユーザー エキスパート」の考えは欠かせない視点であり、それを踏まえながら行政や企業、NPO等が連携していくことが大切であると実感させられました。これもひとえにバレリー所長をはじめ、アダプティブ・エンバイロメンツの皆様が、私たちの視察趣旨に沿った行き届いた手配をしてくれたお陰であります。皆様の多大なる御協力とおもてなしに改めて心から感謝申し上げます。

おわりに、事務局として至らない点が多々ありましたが、最後まで御協力いただいた団員の皆様に感謝申し上げます。今後とも福島県のUD推進に向けて継続的な交流をお願い申し上げます。

平成18年度「ふくしま型UD実践リーダー養成事業」

成果発表フォーラム 次第

みんな一緒にいい!!



わたしたちができること

平成19年3月3日(土)
郡山養護学校視聴覚・会議室
13:00~16:30

1. (13:00) 開会のことば 古川あゆみ
2. 団長あいさつ、団員紹介 河野由美子
3. 日程説明 佐藤 玲子
4. 1部:「ふくしま型UD実践リーダー養成事業」団員による研修内容と成果発表
(13:10) 研修内容の発表 渡邊 大輔
成果発表 村松 稔・河野由美子
5. 2部:郡山養護学校校舎内見学
(13:50) 郡山養護学校の概要 郡山養護学校 教頭 渡邊 恵一先生
郡山養護学校はこんなところ 江連 香織
郡山養護学校の建築的魅力 佐藤 玲子
校舎内見学 フリーダムトレイル(赤ライン)に沿ってごらん下さい
(休憩)
6. 3部:講演
(15:00) 高校生団員と関根氏とのパネルディスカッション
阿部美咲・江連香織・大瀧裕司・桑原了一・直井風子・藤島 卓・古川あゆみ
(15:20) 講演 (株)ユーディット 代表取締役 関根 千佳氏
質疑応答
7. (16:30) 閉会のことば 桑原 了一

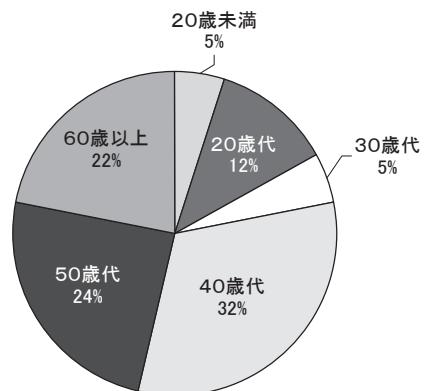
成果発表フォーラム参加者のアンケート結果

◇開催日時:平成19年3月3日(土)13:00~16:30
 ◇会場:福島県立郡山養護学校1階視聴覚・会議室
 ◇回収数:41枚

1. あなた自身についてお答えください。

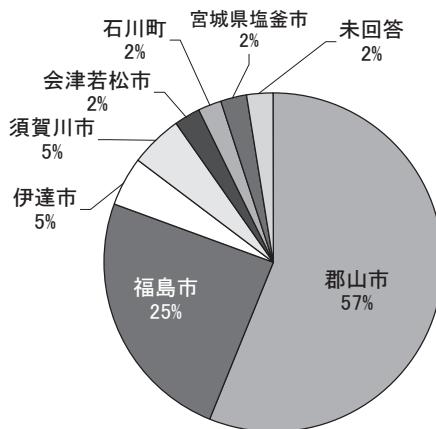
(1)あなたの年齢は?

	人数
20歳未満	2
20歳代	5
30歳代	2
40歳代	13
50歳代	10
60歳以上	9



(2)あなたの居住市町村は?

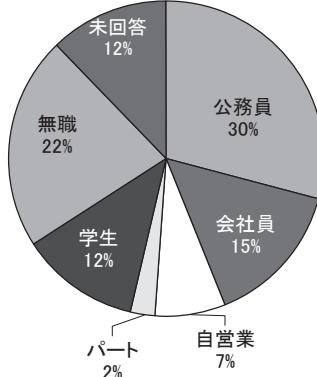
	人数
郡山市	23
福島市	10
伊達市	2
須賀川市	2
会津若松市	1
石川町	1
宮城県塩釜市	1
未回答	1



(3)あなたの職業は?

	人数
公務員	12
会社員	6
自営業	3
パート	1
学生	5
無職	9
未回答	5

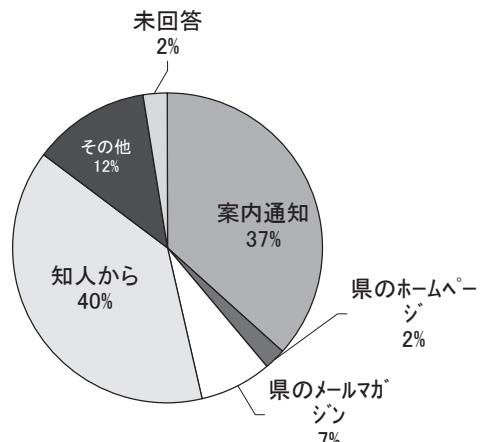
※学生(大学3年生 2名 中学1年生 1名 小学5年生 1名)



2. このフォーラムを何で知りましたか？

	人数
案内通知	15
県のホームページ	1
県のメールマガジン	3
新聞報道	0
知人から	16
その他	5
未回答	1

※その他（父親から・難聴協会の案内）

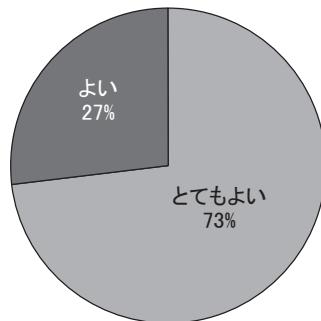


3. フォーラムの内容についてお答えください。

第1部 「団員による研修内容と成果発表」

(1) 発表内容はいかがでしたか？

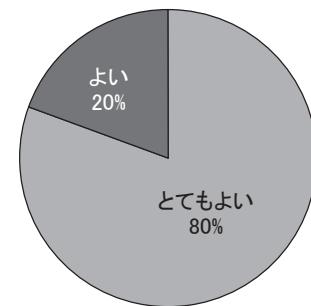
	人数
とてもよい	30
よい	11
よくない	0



第2部 「校舎内見学」

(1) 説明の内容はいかがでしたか？

	人数
とてもよい	33
よい	8
よくない	0



(2) 見学してみての感想

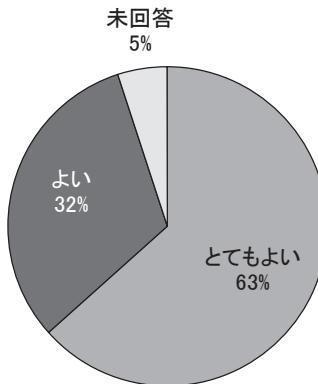
- ・校舎は素晴らしい。また、その計画から設計建築に至る経過も素晴らしい。学生が一緒に案内してくれるのも良い。（50代）
- ・とても明るく、『光の学校』というキャッチフレーズがとても合っていると思った。（20代）
- ・もっと市民への周知をして下さい。モデルとして広大な分野に活用されるべき。（60代）
- ・障がい者にやさしい素晴らしい設計、施設、設備。本校が特別の学校でなく、他校の校舎、施設、設備も整備されることを希望します（50代）

- ・学校施設を広く一般県民の方々へ開放する試みを今後期待します。(50代)
- ・光がたくさん入ってとても温かい学校だと思った。設備面も大変充実していて、学生さん達が安心して快適に学べる環境に感心した。(30代)
- ・見学時間がもう少し長くてもよかったです。(30代)
- ・夢のような学舎だった。空、自然の緑が屋内から見えるのは心が落ち着くようです。(60代)
- ・環境が人を育てるということを実感。(50代)
- ・広いということはとても良いことであると同時に体力も必要だと実感した。(50代)
- ・介護施設も広くて明るくなれば良いと思った。(40代)
- ・UD思想を生活すべてにあてはめて今後考え、実践していく。(60代)

第3部 「パネルディスカッション、講演」

(1)高校生団員の発言内容はいかがでしたか？

	人数
とてもよい	26
よい	13
よくない	0
未回答	2

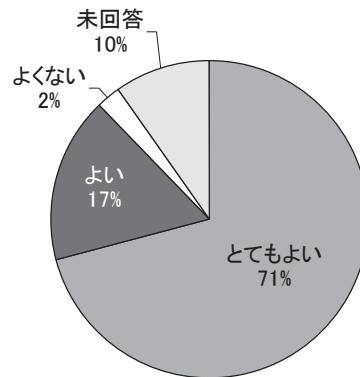


※「とてもよい」の回答の意見として

- ・特に女学生に感服(60代)

(2)講演内容はいかがでしたか？

	人数
とてもよい	29
よい	7
よくない	1
未回答	4



※よくないの理由

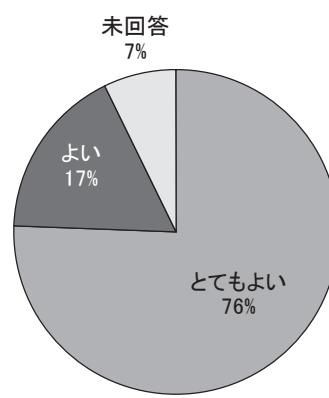
- ・集中して聞くことができなかった。(20代)

※とてもよいの感想として

- ・凄い情報量がベース。また開催して下さい。(60代)

(3)講師の人選はいかがでしたか？

	人数
とてもよい	31
よい	7
よくない	0
未回答	3



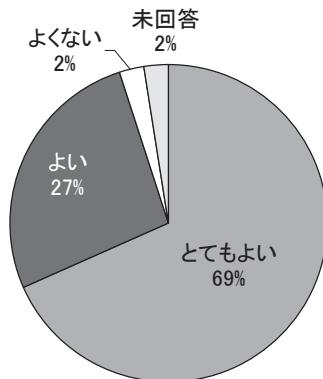
※「よい」の意見として

- ・話す速度がはやかった。

4. 受講環境についてお答えください。

(1)受講環境(手話通訳やパソコン要約筆記など)の配慮はいかがでしたか?

	人数
とてもよい	28
よい	11
よくない	1
未回答	1



※「よくない」の理由

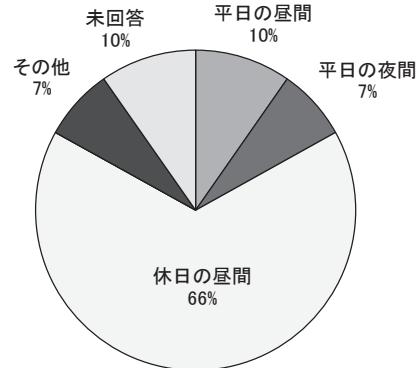
・パソコン要約筆記をもう少しがんばってもらいたかった。(20代)

(2)その他要望等

- ・駐車場から会場への案内(矢印だけでも)があれば良かった。(50代)
- ・話すスピードが速く、手話やパソコンを見ながら聞くと内容把握が難しい(20代)
- ・もう少し学生団員の話が聞けたらより良かったと思いました(30代)。
- ・時間の都合もあるでしょうが、話者は、聞く方の理解を考えて話しているのか、いつもフォーラム等で思うことです(60代)
- ・ピーアールをもっとしてもよいのでは?(40代)
- ・内容の濃い講演だったが、早口で聞き落としもあった。ループの無線マイクの持ち方、発表者の声の質で聞こえがマチマチ。UDとしては今イチ。(60代)
- ・OHPのそばに手があるとみやすい(最後は良かった)。(60代)

5. イベントの開催日はいつを希望されますか?

	人数
平日の昼間	4
平日の夜間	3
休日の昼間	27
休日の夜間	0
その他	3
未回答	4



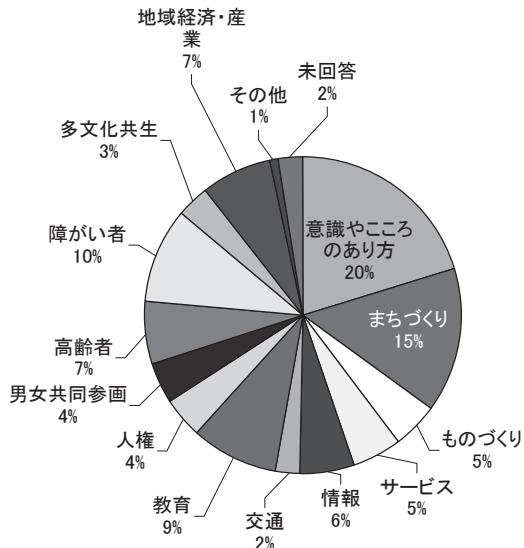
※「その他」の意見

・イベントの内容による。(50代)

・1年の四季に応じてなので、答えられない。(40代他1名)

6. 今後、ユニバーサルデザインの研修等で取り上げてほしいテーマは何ですか？(複数回答可)

	人数
意識やこころのあり方	25
まちづくり	18
ものづくり	6
サービス	6
情報	7
交通	3
教育	11
人権	5
男女共同参画	5
高齢者	8
障がい者	12
多文化共生	4
地域経済・産業	9
その他	1
未回答	3



※その他

- ・家族のあり方。家族が一番難しいから(60代)

7. その他意見、要望、感想等

- ・関根さんの講演は、もっと障がい者・障がいのある生徒にも聞いてもらったらよかったのでは？(50代)
- ・がんばって福島にUDの考え方を広めていきましょう！(20代)
- ・今回は、団員さんたちの笑顔もあり、とても温かい雰囲気で良かったです。(20代)
- ・長時間のお話ありがとうございました。(60代)
- ・団員の方々の報告や、今回の報告会の準備や様々な企画、大変ご苦労様でした。UDの考え方方が少しずつ地域社会に、何より行政の方々に広がっていくことを願っています。(50代)
- ・とても良い報告会でした。高校生のパネルディスカッションから関根さんの講演につなげたのがとても良かったです。福島県がUDの進んだ住みやすいまちになるよう私も努力したいと思います。今日は、ありがとうございました。(50代)
- ・日本は、やはり障がいの方に対する理解が足りないとつくづく感じました。ユニバーサルデザインという考えが、多くの人々に広まり、根づいていくよう社会・地域が一丸となって取り組む必要があると感じました。(30代)
- ・すばらしい設備で感動しました。孫達に見学させたかった。(60代)
- ・今回の成果発表フォーラムは、参加してとてもよかったですと思えるものでした。(20代)
- ・設備が整って、明るく広く、ここが日本かと思う程でした。(60代)
- ・あたり前の形、意識の在り方を改めて考えさせられました。今後の教育のあり方から考えて、子供等の多く参加も出来るイベントも企画してはいかがかと。(40代)
- ・団員の素直な意見が聞けて素晴らしいでした。施設見学時の対応として、利用者の意見が聴ければ良かったかと感じました。安心して住めるような社会にする為に頑張るぞ、という気持ちにさせられる素晴らしい講演であった。(50代)
- ・「和気あいあい」とした雰囲気が、会が進むにつれ肌で感じてきました。これも1つのUDかなあとと思いました。ありがとうございました。(60代)
- ・有意義なひとときでした。(50代)
- ・40年間県職員として勤めさせていただきましたが、職種も違っていたので地元にいながら養護学校に来たのははじめてでした。県民の皆様にもっと知っていただけるようにしたいですね。
- ・今回の催しでもなければ、通常来るのはできなかったので、たいへんためになりました。ユニバーサルデザインは、すべての人にとっても良いことにつながる。(60代)
- ・次にこのような企画があれば参加してみたいです。アメリカにも実際に行ってみたいです。(40代)
- ・団員へのお知らせ(文書)もユニバーサルデザインにしていただきたいと思います。(40代)
- ・発表会と講義を別にしてほしかった。講義はとても内容がわかりやすかったが、質疑応答の時間が少なかった。(50代)
- ・研修お疲れ様でした。心のこもったgoodなプレゼンテーションでした。(40代)
- ・たいへんお世話になりました。ありがとうございました。(20代)



人権男女共生グループ
TEL 024-521-7188 FAX 024-521-7887



うつくしま、ふくしま。

障がい者支援グループ
TEL 024-521-7170 FAX 024-521-7929

特別支援教育グループ
TEL 024-521-7780 FAX 024-521-7167